

関根横田遺跡

(前橋市 0008 遺跡)

一般国道17号(道の駅「(仮称)まえばし」)
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

国土交通省関東地方整備局
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

関根横田遺跡

(前橋市 0008 遺跡)

一般国道17号（道の駅「（仮称）まえばし」）
建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2021

国 土 交 通 省 関 東 地 方 整 備 局
公 益 財 団 法 人 群 馬 県 埋 蔵 文 化 財 調 査 事 業 団

序

国道17号上武道路の全線開通により、交通渋滞の解消や物流の効率化に加え、人の流れが大きく変化することによる地域活性化への寄与が期待されています。上武道路を利用する人々が、地域との関わりの入り口となることを期待し、道路利用者の利便性向上及び安全性確保、災害時の防災拠点の機能に加え、地域活性化を実現するとともに、地域交流という観点から、前橋市関根町に道の駅「(仮称)まえばし」が計画されることとなりました。赤城山の長い裾野の際に位置し、市外県外からの人々を迎える上武道路と、市内からの人々が訪れる国道17号の結節点であるこの場所の優位性を活かし、豊かな自然を持つ赤城と、快適な都市空間としての前橋市街地をつなぐ「前橋の新たな玄関口」として大いに期待されるところです。

工事対象地は、前橋市の遺跡台帳に登録された周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内に所在したため、埋蔵文化財の記録保存の措置がとられることとなり、令和2年度に当事業団が発掘調査を実施しました。その結果、中世の溝、平安時代の水田、奈良～平安時代の溝、縄文～弥生時代の土坑などの遺構と土器等の遺物が発見され、令和3年度に発掘調査の成果をまとめる整理作業を実施し、このほど発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでには、国土交通省関東地方整備局、同高崎河川国道事務所、群馬県地域創生部文化財保護課、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者の方々に多大なるご支援とご協力を賜りました。ここに篤く御礼を申し上げますとともに、本書が地域における歴史の解明と、豊かな地域社会の形成に役立てられますことを願いまして、序といたします。

令和3年10月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 向 田 忠 正

例　　言

1. 本書は、一般国道17号(道の駅「(仮称)まえばし」)建設事業に伴って発掘調査された関根横田遺跡(前橋市0008遺跡)の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県前橋市関根町77、79番地に所在する。
3. 調査対象面積は704.0m²である。
4. 事業主体は国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所である。
5. 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
6. 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。

名　　称：令和2年度一般国道17号(道の駅「(仮称)まえばし」)建設事業

履行期間：令和2年4月1日～令和2年7月31日

調査期間：令和2年4月1日～令和2年4月30日

調査担当：須田正久(上席調査研究員)

遺跡掘削工事請負：有限会社高澤考古学研究所

地上測量委託　　：技研コンサル株式会社

7. 整理事業の期間と体制は次のとおりである。

名　　称：令和3年度一般国道17号(道の駅「(仮称)まえばし」)建設事業

履行期間：令和3年7月1日～令和3年10月31日

整理期間：令和3年7月1日～令和3年8月31日

整理担当：高島英之(専門員(総括))

8. 本書作成担当は次のとおりである。

編集・本文執筆・遺物写真撮影：　　高島英之(専門員(総括))

遺物観察　　：石器・石製品　　岩崎泰一(専門調査役)

　　弥生土器　　橋本　淳(主任調査研究員・資料統括)

　　古代土師器・須恵器　神谷佳明(専門調査役)

　　中近世陶磁器・土器　大西雅広(専門調査役)

　　金属・木製品　　板垣泰之(専門員(主任))

デジタル編集　：　　齊田智彦(主任調査研究員・資料統括)

遺物保存処理　：　　板垣泰之、関　邦一(専門調査役)

9. 出土遺物および写真・図面等記録類は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

10. 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関にご助言をいただいた。

国土交通省関東地方整備局、同高崎河川国道事務所、群馬県地域創生部、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会

凡　例

1. 本報告書に用いた遺構名称は、発掘調査時の名称を踏襲したが、整理作業の過程で変更したものもある。
2. 本報告書に用いた座標・方位は、すべて国家座標第IX系(世界測地系)による。主軸方位等の計算にもこれを用いた。
3. 本報告書の遺構図版縮尺は以下の通り。ただし、遺構によってはこの限りではない。
 - 遺構平面図 溝1/80、水田1/100、土坑1/40
 - 遺構断面図 溝1/40、水田1/50、土坑1/40
4. 本報告書の遺物図版縮尺は以下の通り。ただし、遺物によってはこの限りではない。
 - 弥生土器、土師器、須恵器1/3
5. 本報告書中の遺構断面図の標高値は、原則として断面図下に「L=○○m」のように表記した。
6. 本報告書における土層断面図及び遺物観察表に記した色調表現は、農林水産省水産技術事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修1988『新版標準土色帳』によった。
7. 本報告書におけるテフラ(火山噴出物)の略号は以下の通り(テフラの名称は町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス』東京大学出版会による)。
 - As-B…浅間B、As-C…浅間C、As-YP…浅間板鼻黄色、As-Ok1…浅間大窪沢1、Hr-FA…榛名二ツ岳渋川

目 次

序
例言
凡例
目次
挿図・表・写真図版目次

第1章 調査に至る経緯、方法と経過 ······	1	3. 4号溝 ······	30
第1節 調査に至る経緯 ······	1	4. 5号溝 ······	32
第2節 発掘調査の方法 ······	2	5. 6号溝 ······	37
1. 調査区と座標の設定 ······	2	第4節 縄文～弥生時代の遺構 ······	37
2. 発掘調査の方法 ······	2	1. 1号土坑 ······	37
3. 遺構測量 ······	3	第5節 遺構外出土遺物 ······	39
4. 遺構写真撮影 ······	3	第4章 調査成果の整理とまとめ ······	41
第3節 発掘調査の経過 ······	3	遺物観察表	
第4節 整理作業の経過と方法 ······	5	写真図版	
第2章 遺跡の地理的、歴史的環境 ······	6	報告書抄録	
第1節 地理的環境 ······	6		
第2節 歴史的環境 ······	9		
1. 旧石器時代 ······	9		
2. 縄文時代 ······	10		
3. 弥生時代 ······	10		
4. 古墳時代 ······	10		
5. 奈良・平安時代 ······	15		
6. 中世 ······	16		
7. 近世・近代 ······	18		
第3節 基本土層 ······	20		
第3章 発見された遺構と遺物 ······	22		
第1節 中世の遺構 ······	25		
1. 1号溝 ······	25		
第2節 古代後期の遺構 ······	25		
1. As-B下水田 ······	25		
第3節 古代の遺構 ······	27		
1. 2号溝 ······	29		
2. 3号溝 ······	29		

挿図目次

第1図 道跡の位置	1	第11図 2号溝	29
第2図 開根横田遺跡周辺地形分類図	7	第12図 3・4号溝	31
第3図 周辺道跡分布図	11	第13図 4号溝出土遺物	32
第4図 調査区位置図	19	第14図 5・6号溝	33
第5図 基本上層	21	第15図 4面全体図	34
第6図 1面全体図	23	第16図 5面全体図	35
第7図 2面全体図	24	第17図 6面全体図	36
第8図 1号溝	26	第18図 1号土坑	37
第9図 As-B下水田1号期	27	第19図 6面4号トレンチ周辺図	38
第10図 3面全体図	28	第20図 道構外出土遺物	39

表 目 次

第1表 周辺道跡一覧表	12	第3表 遺物觀察表	42
第2表 掘出遺構数一覧表	39		

写真目次

PL. 1	1. 1面1号トレンチ全景(北東から) 2. 1面2号トレンチ全景(北東から) 3. 1面3号トレンチ全景(北東から) 4. 調査区全景(上が北東)	PL. 5	1. 3・4号溝全景(西から) 2. 3号溝全景(北東から) 3. 4号溝全景(東から) 4. 4号溝A-A'セクション(東から) 5. 3・4号溝B-B'セクション(南西から) 6. 4号溝C-C'セクション(北西から) 7. 4号溝遺物出土状況(西から)
PL. 2	1. 2面全景(上が北西) 2. 1号溝全景(南東から) 3. 1号溝全景(北西から) 4. 1号溝A-A'セクション(南東から)	PL. 6	1. 5号溝全景(北東から) 2. 5号溝A-A'セクション(南西から) 3. 6号溝全景(南東から) 4. 6号溝A-A'セクション(南東から) 5. 4面全景(北東から)
PL. 3	1. 1号畦全景(東から) 2. 1号畦東側全景(東から) 3. 1号畦西側全景(東から) 4. 1号畦水口部(北東から) 5. 1号畦A-A'セクション(西から) 6. As-B下水田検出状況(北東から) 7. 2面作業風景(南東から)	PL. 7	1. 5面全景(南東から) 2. 6面全景(南西から)
PL. 4	1. 3面全景(南西から) 2. 3面南西隅部、1号流路全景(南西から) 3. 2号溝全景(南東から)	PL. 8	1. 1号土坑全景(北西から) 2. 1号土坑A-A'セクション(南東から) 3. 4号トレンチA-A'セクション(南西側(北西から) 4. 南西壁基本土層(北東から) 5. 北西壁基本土層(南東から) 6. 北西壁基本土層(南東から)
		PL. 9	出土遺物

第1章 調査に至る経緯、方法と経過

第1節 調査に至る経緯

前橋市では、国道17号上武道路整備(平成29年3月19日全線開通)を契機として、同市で4番目となる新たな道の駅の設置を計画した。上武道路の全線開通により、交通渋滞の解消や物流の効率化に加え、人の流れが大きく変化することによる地域活性化への寄与が期待されている反面、前橋市を通過するのみで滞在しない車両が増加する可能性があり、このことが地域交流及び経済に与える負の影響が懸念されたからである。道の駅を整備するにあたっては基本機能として休憩機能、情報発信機能、地域連携機能を備え、道路利用者の利便性向上及び安全性確保、災害時の防災拠点の機能に加え、地域活性化を実現するとともに、上武道路を利用する人々が前橋市に滞在する機会をもたらし、地域との間わりの入り口となることが期待されている。

前橋市では、道の駅に導入する機能の方向性を探るた

め、平成27(2015)年度にマーケティング調査を実施した。前橋市の現状に加え、市の強みや印象をインターネット調査などにより調査・分析を行い、赤城山の長い湖野の際に位置し、市外県外からの人々を迎える上武道路と、市内からの人々が訪れる国道17号の結節点であるこの場所の優位性を活かし、豊かな自然を持つ赤城と、快適な都市空間としての前橋市街地をつなぐ「前橋の新たな玄関口」としての道の駅とすること、及び、山間部と都市部の中間地点に位置することにより、両方の魅力を兼ね備えた場所とし、新たなアクティビティの機会を創出することで、市民には新たなライフスタイルの選択肢を、来訪者には前橋や赤城にアプローチするきっかけを与え、「ここにしかない」価値を提供する施設とすることを道の駅の整備の方向性と、取組方針として設定した。

そして、地域交流という観点からは、前橋市の強みである「農業」と「食」を核にした取り組みを進めること、また、赤城の自然を活用した前橋市ならではの体験を提供することが重要であるという検討の結果から、整備の



第1図 遺跡の位置(国土地理院20万分の1地勢図「長野」平成24年5月1日発行及び同「宇都宮」平成23年6月1日発行を加工)

第1章 調査に至る経緯、方法と経過

方向性を「ここにしかない赤城を味わい、ここでしかできない赤城を体験する。(心地よく安全な前橋の魅力を発信する拠点として官民連携で取り組みを進める。)」と決定された。

対象地は、群馬県庁の北東約5km、前橋市閑根町に位置している。周辺一帯は水田地帯であり、対象地の南側には上武道路が東西に走っている。対象地の南側一帯には、上武道路建設に伴って発掘調査がおこなわれた田口下田尻遺跡や閑根赤城遺跡、閑根細ヶ沢遺跡等が位置しており、9世紀から11世紀にかけての集落や製鉄関連遺構など多種多様な遺構・遺物が検出されている地域である。

本事業の対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である前橋市0008遺跡の範囲内に当たっており、「古墳時代～近世の集落・生産遺跡」として前橋市遺跡台帳に登録されているため、事業着手に際して、令和元(2019)年11月19日付け国閑整高道管二第104号にて、国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所(以下、国交省と称する)より群馬県教育委員会事務局(当時)文化財保護課(以下、県文化財保護課と称する)宛て、埋蔵文化財包蔵状況に関する試掘・確認調査の実施が依頼された。

これをかけて令和元年12月16～18日、県文化財保護課が現地において確認調査を実施し、As-B下水田を検出したため、県文化財保護課は国交省に対し令和元年12月27日付け文財第706-106号にて、確認調査によって遺構・遺物が確認されたことから、トイレ棟建設対象地部分についての発掘調査が必要となる旨を回答した。

次いで、令和2(2020)年3月5日付国閑整高道管二第143号にて国交省より前橋市教育委員会(以下、前橋市教委と称する)に充ててトイレ棟建設に伴う合計面積704.0m²分の埋蔵文化財包蔵地内における工事計画に関する文化財保護法第94条に基づく通知が提出され、前橋市教育委員会は、令和2年3月18日付、前教文第1056-2号にて県文化財保護課に進達した。県文化財保護課では、埋蔵文化財包蔵地における事前の試掘・確認調査によって遺構・遺物が検出されており、事業によって破壊が及ぶことは明白であること、また、用地等の制約により、設計変更等による埋蔵文化財保護の対応も不可能であることから、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存の措置を執ることが最も適切であるとの結論に至り、発掘調査

の実施に向けて、国交省、前橋市教委、発掘調査を実施する公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下、当事業団と称する)、地元等との協議に入った。

調整・協議の結果、翌令和2年度に当該地における計704.0m²を対象とする発掘調査を当事業団が実施することとなり、履行期間を令和2年4月1日～令和2年7月31日、調査期間を令和2年4月1日～令和2年4月30日の1箇月間として、実施されることになったのである。

なお、令和3年7月1日、道の駅「(仮称)まえぼし」は、道の駅「まえぼし赤城」という名称になることが発表された。

第2節 発掘調査の方法

1. 調査区と座標の設定

調査対象地は面積704.0m²で、調査区は北東～南西方向に長い、東側に約43度傾いた、長辺約33.41m・短辺約21.07mの長方形形状を呈している。

発掘調査に用いた座標は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)であり、10m×10mを基本とし設定した。遺構図中の座標については、座標値の下3桁を「X軸-Y軸」の順で記し、「X=69800、Y=-49500場合、「800-500」のように略記した。調査区は、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標系第IX系)のX=49075～115、Y=-69880～925の範囲にそれぞれ収まる(第5図参照)。

遺構測量における遺構の位置及び遺物出土位置などはすべて世界測地系の座標によって記録しているため、本報告書でも、遺構外出土遺物を含め、遺構・遺物の位置情報については、世界測地系の座標によって表記する。

2. 発掘調査の方法

発掘調査は、調査範囲を国家座標に載せるための基準点測量から開始し、同時に事務所の設営を行った。

調査範囲確定後、重機による表土掘削を開始し、重機掘削を終了した箇所から、安全を確認した上で発掘作業員を投入し、人力による鋤镰を使用しての遺構確認作業を行い、発見した遺構の掘削調査に着手した。

発掘作業員による遺構の掘り下げ等、調査の詳細な方法や手段、手順等については、発掘調査工事請負会社の現場代理人に逐一指示するとともに、常に安全対策を万

全とし、作業の安全を十二分に図った上で実際の作業に着手するよう再三に亘って要請した。

埋没土の観察、写真撮影、測量委託業者への図化指示等は担当者が行った。本遺跡では、洪水や火山灰層に埋もれ、複数の遺構確認面が検出されたので、それぞれの調査面で掘削・確認・記録を行った。

出土遺物は、遺物収納箱1箱分の土器・陶磁器・石器・石製品・金属製品等と、若干の木製遺物が出土した。

3. 遺構測量

遺構等の測量は、遺構断面及び平面実測図とも縮尺1/20を基本とし、長大かつ広範囲にわたる遺構を実測する際には、適宜1/60・1/100などの縮尺とした。

遺構平面実測図の作成に当たっては、測量会社に地上測量を委託し、データ収録媒体及び打ち出し図面の提出を受けた。

遺構断面図は、測量会社に委託して作成した。

上記、委託先測量会社により作成されたデジタルデータ成果品およびアナログ実測された原図等は、調査記録として保存されている。

4. 遺構写真撮影

発掘調査において、すべての遺構の写真是発掘調査担当者が撮影した。主要な遺構については、中判カメラを用いてiso400モノクロフィルムを6×7cm判サイズで撮影し、撮影記録はネガフィルムの状態で保存し、焼き付け写真を貼付したフィルムの検索台帳を作成した。

また、発掘調査の過程で、調査の進捗状況の記録、及びすべての遺構について、デジタルカメラで撮影を行った。

また、調査記録として、遺構ごとに土層断面、遺物出土状態、遺構全景等の撮影を行い、さらに必要に応じて遺構の各部分について、検出および調査の状況について微細な接写を行っている。

調査区の全景写真等は、調査の進展にあわせて行い、併せてUAVによる空中写真撮影を業者に委託して実施した。

なお、撮影した写真的デジタルデータはHD等のメディアに保存し、データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換

えるリネーム作業を行った。

第3節 発掘調査の経過

発掘調査は、令和2(2020)年4月1日から同年4月30日の1箇月間、704.0m²を対象として実施された。工事対象地は「前橋市0008遺跡」として前橋市の遺跡台帳に登録された埋蔵文化財附蔵地の範囲内であったが、先述した通り、工事対象箇所において県文化財保護課が遺構・遺物の有無を確認するための試掘・確認調査を実施し、複数面に亘る遺構確認面の存在と、遺構・遺物の存在を確認したため、試掘・確認調査における遺構確認の状況から、トイレ設置工事対象地の全域が埋蔵文化財発掘調査による記録保存措置の対象となった。

なお、掘削重機や、運搬用重機が、水路を通行する箇所には、水路保護の為、賃借した敷設板を敷設した。また、掘削作業員による掘削土の搬出等に不整地運搬車を使用した。

各調査面の検出概要是、下記の通りである。

1. 第1面

中世の遺構の有無を確認するためのトレンチを、南西から北東方向に3本設定し、平面、断面を精査し遺構確認を行った。第2面の水田を掘り込んだ中世の溝1条を検出した。

2. 第2面

天仁元(1108)年の浅間山噴火時の火山噴出物As-Bに覆われた水田を確認した。水田と北西から南東方向に延びる畦を発見し、調査を行った。

当初、遺構の存在は第2面までの想定であったが、下層の堆積土の確認のためトレンチを入れたところ、水田下約40cm下に6世紀初頭における榛名山噴火の際の火山噴出物Hr-FAや洪水堆積物、さらに約30cm下には3世紀後半の浅間山の噴火に伴う火山噴出物As-Cの混土の堆積等が確認出来たため、調査終了後にさらに掘削し、各面の調査を継続していった。

3. 第3面

Hr-FA上面で溝を発見し、第3面として調査を行った。

溝は5条発見することが出来、4号溝からは9世紀代の土器に「野」一文字が書かれた墨書き土器や土師器・須恵器などの土器片が出土した。

4. 第4面

Hr-FA直下面として遺構の確認を行ったが、第3面の溝によって破壊され、遺構は見つかなかった。

5. 第5面

第4面の下層において、小礫混じりの洪水堆積物の堆積を確認することが出来、この下層が粘質土壤で水田耕作土の可能性が想定されたため、南西範囲の調査を行ったが、水田面は検出することが出来なかった。

6. 第6面

第5面下のAs-C混土層から下層は地形の起伏が富み、深い部分には泥炭質の堆積土が確認され、遺構・遺物は発見することが出来なかった。

西隅部で谷地縁辺部を確認することが出来、土坑1基が検出された。また、北西隅部の谷縁辺の泥炭層から弥生土器小片が数点出土した。

この面においては、調査区の大部分が谷地であることを確認することが出来た。

調査日誌抄

令和2年

- 4月1日(水) 担当者1名着任。調査区設定。調査準備。届出書類等作成等事務。調査事務所トイレ設置。
2日(木) 重機による表土掘削着手。1面(As-B混土上面)トレンチ調査実施。発掘調査事務所駐車場入口部分に敷板設置。
3日(金) 1面トレンチ3箇所精査。中界面における遺構は確認出来ず。
6日(月) 重機による2面(As-B下水田面)掘削開始。As-B下水田検出作業。
8日(水) As-B下水田検出作業終了。1号溝(中世)掘削精査。
9日(木) As-B下水田面精査。畦畔等写真撮影・実測後、斬ち割り、断面写真撮影及び実測。南隅部深掘。Hr-FA層を確認。
10日(金) As-B下水田精査標。水口部写真撮影。
13日(月) 降雨のため現場作業中止。
14日(火) 重機による3面(Hr-FA面)掘削、遺構確認。
15日(水) 3面及び2面2~5号溝遺構検出、1号流路(中世)検出作業継続。調査区壁断面にて基本土層実測。
16日(木) 当初想定していたFA面の実測がそれを上回り、40cm以上もあることが判明したため、調査区南側においては重機による掘削継続。Hr-FA面精査。溝4号実測、遺物取り上げ。4号溝は調査区を横断しており、8世紀代の柱がトレンチ内調査において出土した。
17日(金) 調査区南側にてHr-FA面精査継続。4号溝検出作業、全員写真及び遺物出土状況写真撮影。5号溝検出作業、写真撮影。
20日(月) 降雨のため現場作業中止。
21日(火) 調査区南側にてHr-FA下掘削作業及び遺構検出作業継続。4号溝検出作業継続、写真撮影及び実測。
22日(水) 重機によりAs-C面掘削、遺構確認作業、写真撮影。
23日(木) As-C下面からは遺構は検出されなかった。トレンチ断面、基本土層精査。調査終了。
24日(金) 埋め戻し作業着手。
27日(月) 埋め戻し作業継続。撤収準備。環境等整備、排土回収作業、遺物・木材収納作業。
28日(火) 埋め戻し完了。排土置場削平完了。撤収完了。
29日(水) 事業団本部にて基礎整理等。
30日(木) 事業団本部にて基礎整理等。
31日(金) 残務処理。調査完了。



調査状況

ンターに収納・保管されている。

第4節 整理作業の経過と方法

整理作業は、令和3年7月1日から8月31日までの2箇月間にわたって国交省の委託を受けて、当事業団が実施した。

出土遺物については、まず、報告書に掲載する土器類、石器・石製品類の選別を行い、土器類、石器・石製品類の写真撮影、接合・復元等の作業を実施した。次いで実測・ト雷斯及び遺物観察表の作成を行い、業務を完了した。なお、今回の調査においては金属製品及び木製品は出土していない。遺構実測図については、まず調査区ごとに順次、各遺構の確認、遺構計測、遺構台帳の整備といった基礎作業とともに、遺構写真との確認作業を行い、その後、図面修正を進め、点検・整理の上、平面図及び土層断面図の編集及び修正、デジタル・トレス原図の作成、土層注記の編集等の作業を行い、デジタル原稿化を行った。

さらに、報告書に掲載する遺構写真を選定した後、レイアウト原案の作成、キャプション原稿の整備等を行い、レイアウト原案及びキャプション原稿及び、遺構写真図版頁のデジタル原稿化を図った。

これらの作業と並行して報告書本文の原稿の執筆を進めた。

それらを経て、デジタル化された遺構図面の校正、本文の原稿執筆及び報告書原稿の総合的なレイアウト等の作業、報告書原稿全体のデジタル組版及び編集作業を行った。

作成された原稿は、業者に委託され、印刷・製本の業務を実施した。なお、業者委託した印刷業務の推移の中で、原稿の校正作業を実施し、完成後、納品を受け、納品された発掘調査報告書は、検品の上、完了検査を実施し、活用に資するために関係各機関へ発送する作業を行った。

また、これらの作業と並行して、調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物の各種図面・写真等の記録類を収納する作業を実施した。発掘調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物にかかる各種図面及び写真等の調査記録資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査セ

参考文献(第1章)

群馬県2007「はばたけ群馬・郷土整備プラン2008~2017」

群馬県2013「はばたけ群馬・郷土整備プラン2013~2022」

群馬県2014「はばたけ群馬プラン・第14次群馬県総合計画・重点プロジェクト(平成26年4月1日改訂)」

群馬県郷土整備部道路整備課(道路企画室) 2013「群馬がはばたくための7つの交通軸構想」

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2020『年報』39

群馬県ホームページ <http://www.pref.gunma.jp/>

マッピングぐんま

http://mapping.gunma.pref.gunma.jp/pref_gunma/top

前橋市・ヤマト・OCOGグループ2018「前橋市新設道の駅整備運営事業基本計画概要版」



土師器接合・復元作業状況



土師器実測作業状況

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

関根横田遺跡(前橋市0008遺跡)は、群馬県の中南部、前橋市街地の近郊、前橋市役所から北へ約5kmの前橋市関根町に所在する。

遺跡が所在する前橋市は、群馬県の県央部に位置し、高崎市に次ぐ群馬県第2の人口を擁する群馬県の県庁所在地である。現在の市域は、旧：勢多郡(旧：東群馬郡・南勢多郡)・群馬郡・佐波郡(旧那波郡)の区域から構成されており、2001年に特例市、2009年には中核市に移行した。

前橋の旧称「雁橋」は、古代東山道駿路上に設置された群馬駅家に因んだ地名と言われているが、江戸時代前期の雁橋藩5代藩主酒井忠挙の時代に「前橋」に改められた。明治時代には製糸業で栄えたが、太平洋戦争の戦災により市街地中心部は壊滅的な打撃を受けたものの、戦後は工場誘致と区画整理を積極的に推進し、復興を遂げた。現在は県庁所在地として県の行政機関に留まらず、国の行政・司法機関や金融保険業等のサービス産業が集積している。『平成26年度群馬県市町村要覧』によると、産業別人口においては第3次産業の割合が非常に高く、71.5%を占めている。

関東平野の北西端、赤城山南麓に位置し、市内には利根川が南北に貫通し、その支流である広瀬川などの中小河川が概ね北西から南東へと流れている。また、伏流水による水質の良さでも知られている。全国の都道府県庁所在地としては最も海から遠く、海岸からは100km以上離れた内陸に位置しているにもかかわらず、市の中央部から南部にかけての市街地では、標高海拔約100m前後と、然程に標高が高いわけではない。但し、市内の高低差は大きく、市内の北部の標高最高地点と南部の標高最低地点との標高差は1759mにも及んでいる。

市内の気候は太平洋側気候と内陸性気候を併せ持っている。冬は新潟・長野両県方面から強烈な北西季節風が吹き、市域に到達する頃には乾燥している。群馬県南部の平野部で体感される、この冬の北西からの乾燥した季

節風は「上州のからっ風」と呼ばれ、この影響で晴天の日が多い。また、前橋市・高崎市・伊勢崎市から埼玉県熊谷市にかけての地域では冬の最低気温が比較的高く、南関東内陸部の東京都府中市・八王子市、神奈川県海老名市、千葉県佐倉市などよりも高いことが多い。夏は内陸部に位置するため地表が温まりやすく、埼玉県熊谷市などと並び暑さが烈しく、更にこの高温のため、発雷が多いという特徴がある。

本遺跡の所在地は関東平野の北西最奥部に当たり、全新世に形成された低地の後背湿地上に立地し、標高はおよそ130m前後である。

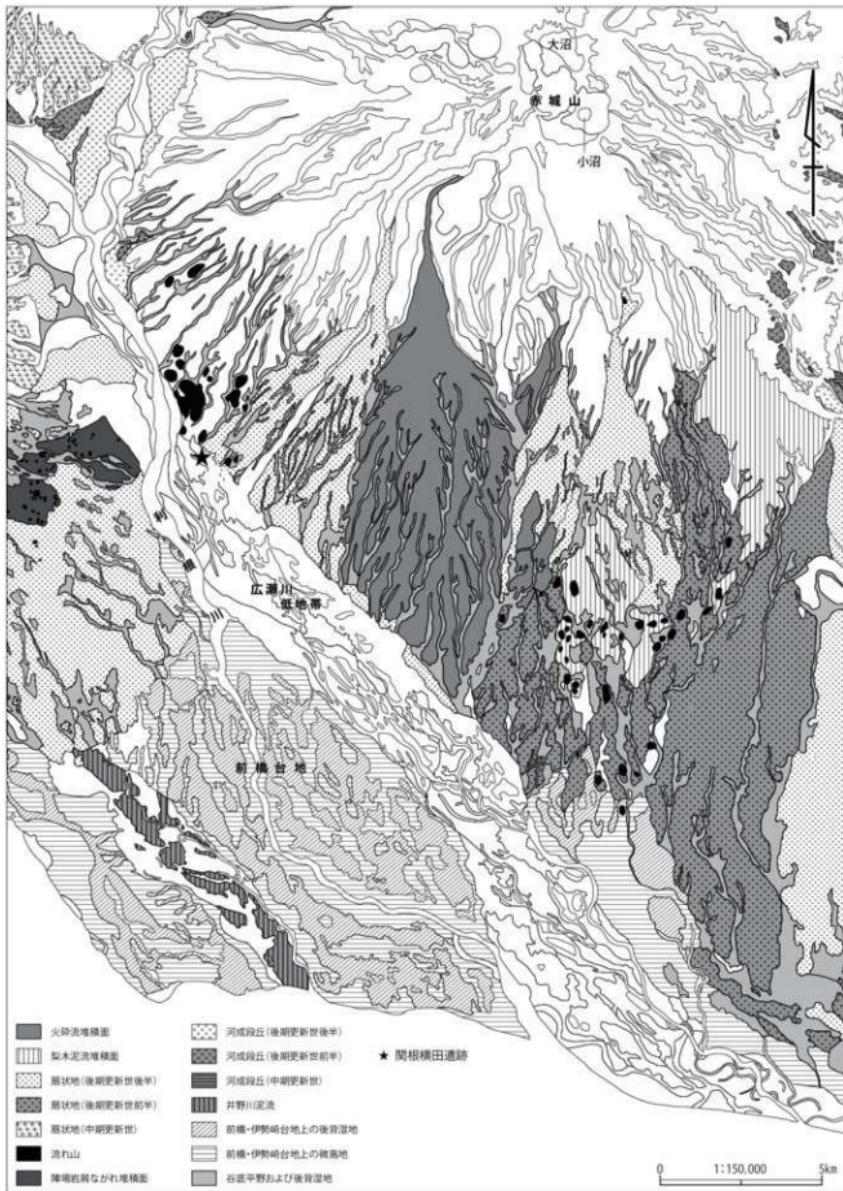
前橋市街地の平野部は、北東部に赤城火山斜面、南西部の台地(前橋台地)と、それらに挟まれた沖積低地(広瀬川低地)および現・利根川の氾濫原からなる。

本遺跡の北東側に所在する赤城山の山麓までは約300mと非常に近い位置にある。赤城山の火山活動は、約50万年前からの古期成層火山形成期、約20万年前からの新期成層火山形成期、約4.5年前からの中央火口形成期からなる。古期成層火山形成期にはスコリア噴出や溶岩流出により大規模な成層火山が形成され、最盛期には標高2,000m以上に達したと推定される。その後、山体崩落による岩屑なだれによって、南麓から南西麓にかけて多田山や権現山、橘山などの流れ山が形成された。

古期成層火山形成後は、長い活動休止期があり山体の浸食が進んだ。新期成層火山の山体は主に溶岩流とテフラから構成され、浸食の進んだ古期成層火山を覆っている。

中央火口形成期には、カルデラの形成が進み、約4.5万年前にはカルデラ内で大規模な噴火が発生し、噴出された軽石は太平洋岸にまで達している。この時噴出した軽石が所謂「鹿沼土」であり、角閃石、輝石、斜長石などを成分とし、通気性・保水性が高く、強酸性で、雑菌をほとんど含まず、土壤乾燥の判断がしやすく、園芸に優れた土として広く知られている。

その後、長七郎山・地蔵岳などの中央火口丘群が形成された。中央火口丘群の形成後は、現在に至るまで浸食



第2図 関根横田遺跡周辺地形分類図(群馬県編「群馬県史」通史編1付図2(1990)を加工)

作用が続き、火山麓扇状地が形成されている。

前橋台地は、浅間山の黒斑火山の山体崩壊によって引き起こされた前橋泥流堆積物によって形成され、その上位には前橋泥炭層が堆積している。これらの上位には、一部で上部ローム層や黒色土が覆う台地と前橋泥炭層の上位に総社砂層が堆積して形成された台地が見られ、前橋台地は2面の台地面を構成している。そのような意味からも前橋台地は利根川が赤城山や榛名山麓の間から関東平野北西縁を通過する場所に広がる合成扇状地でもある。

前橋台地の前橋泥流堆積物の上下からは浅間板暮褐色テフラ2・3が確認されており、前橋泥流の堆積年代は約2.3万年前と推定される。

前橋台地と赤城火山南麓斜面との間には広瀬川低地帯が広がり、前橋台地と広瀬川低地帯との間は比高差が数mもの崖となっている。しかし、現在の広瀬川の流量では広瀬川低地帯を形成するには不足と考えられており、一方、利根川は前橋台地の中央部を不自然に流下していることから、広瀬川低地帯が利根川の旧流路であったと推定するのが妥当であろう。利根川流路の変化は、榛名山の陣馬岩屑なだれにより、当時の流路が埋没してしまったことによるものと考えられている。本遺跡周辺では、更新世末から榛名山や浅間山の火山噴出物が流下し、そのたびに利根川の流路は変更されたものと考えられている。そのため、河川と火山噴出物とが織りなす様々な地形の変化が生まれた場所もある。謂わば、山間部を抜け出た利根川が、初めて関東平野に注ぐ、その注ぎ口に当たる場所に本遺跡は立地していると言って良い。

また、本遺跡の北西側には、利根川を挟んで、榛名山があり、その山麓は利根川まで迫っている。

本遺跡は、赤城火山南西麓斜面と広瀬川低地帯との間、東側を細ヶ沢川、西側を桃ノ木川に囲まれた微高地から低地にかけて立地し、調査地点は、北東側から南西側にかけて緩傾斜している。

本遺跡の西約1.5kmには群馬県利根郡みなかみ町にある三国山脈の一つ、標高1,840mの大水上山に源を発し、流路延長約322kmで信濃川に次いで日本第2位、流域面積は約1万6,840km²で日本第1位であり、日本列島屈指の大河川である利根川が南流している。この利根川のほぼ旧流路をなぞっているのが現在の利根川支流である広

瀬川と桃ノ木川で、広瀬川は本遺跡の北側、渋川市北橘町の坂東合口で取水し、利根川沿いの自然堤防に沿って南流している。また、現在、広瀬川は、本遺跡の南東約1.5kmの位置を経て、南南東に向かって流れている。一方、赤城山に源を発する法華沢川、細ヶ沢川、大堰川や赤城白川等の中小河川は山麓を開析しながら広瀬川低地に下っている。また、利根川沿いには広瀬川低地帯の旧中州の広がりが見られるが、この旧中州は利根川の自然堤防を形成しており、その形成時期は、1108(天仁元)年降下の浅間山火山灰As-B降下以降とされているが、前橋市田口町の田口上田尻遺跡における古墳時代集落の検出状況からみれば、その形成は古墳時代前期まで遡る可能性が高い。また、広瀬川低地帯の旧中州利根川寄りには、旧河道の痕跡が見られ、利根川の複雑な流路変更の様子を偲ばせている。このようなことから、本遺跡周辺は旧・利根川の自然堤防である微高地と後背湿地である低地や旧河道と現利根川沿いの微高地地形に立地する。

沖積地における近代の集落は、1885(明治18)年測図の陸軍迅速図に示されるように、赤城山麓地帯にも営まれているが、沖積地における集落は微高地に営まれている。

本遺跡周辺は戦後しばらくの間は典型的な農村地帯であり、現在も水田が形成されているが、この水田は江戸時代前期の前橋藩主酒井忠孝による用水整備を伴う新田開発によるものであり、從前は桃ノ木川や小河川沿いに細々と営まれていたに過ぎない。近年では市街地化が進行し、本遺跡の南西には国立大学法人群馬大学の荒牧キャンパスが、西には群馬県総合スポーツセンターがあり、それ以南は住宅団地が造成されている。本遺跡の地は、一般国道17号とそのバイパスである上武道路との交差点から東に約200m、国道17号と一般県道四ツ塚原之郷前橋線との交差点の南東に約350mに位置する交通の要衝である。

参考文献

- 群馬史編さん委員会1990『群馬県史』通史編1
- 群馬県総務部市町村課2015『平成27年度群馬県市町村要覧』
- 群馬県地質図作成委員会1995『群馬県10万分の1地質図』
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2014『利根赤城遺跡』
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『新田上遺跡』
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『利根細ヶ沢遺跡』
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2015『弓削切道遺跡・青柳宿上遺跡』
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2016『川端根岸岸邊遺跡』
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2017『田口下田尻遺跡』
- (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2017『輪輪寺親翁前遺跡』
- 前橋市史編さん委員会1971『前橋市史』1~3

第2節 歴史的環境

本遺跡の所在地である前橋市閑根町の名は、かつて、利根川が、当町北端付近から関東平野へと流れ出し、緩斜面の台地と「広瀬川低地」の細長い沖積低地の中央を南下した地点に「元斎塚」という塚が所在し、当町が「塚の根」に位置していたことに由来すると言われている(『前橋風土記』、貞享元(1684)年成立)。

調査対象地は、インターネット上に公開されている群馬県統合型地理情報システム(GIS)「マッピングぐんま」遺跡地図平成25年改訂版(mapping.gunma.pref.gunm.ajp/pref.gunma-iseki/Portal)に掲れば、「前橋市0008遺跡」として周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲に入っており、時代は「古墳・奈良・平安・中世・近世」、種別は「集落・生産遺跡・その他」となっている。

この前橋市0008遺跡には他に、当事業団が発掘調査した下記3遺跡がその範囲に入っている。

①田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡・一般国道17号(前橋渋川バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

- ・調査期間：平成17(2005)年8月1日～同年12月31日、平成18(2006)年4月1日～同年12月31日、平成19(2007)年9月1日～平成20(2008)年3月31日、同年4月1日～平成21(2009)年1月31日

- ・整理期間：平成19年4月1日～平成20年3月31日、平成21年4月1日～平成22(2010)年3月31日、平成23(2011)年4月1日～平成24(2012)年3月31日

- ・報告書刊行：平成24年3月16日

- ・調査成果：天明3(1783)年の浅間山噴火に伴う泥流(天明泥流)被害の復旧痕と、天明泥流下の建物と水田・畑、中世から近世にかけての溝が多数検出された。また古墳時代前期As-C降下以前の竪穴建物建物が多く検出され、水田開発を目指したと考えられる南北方向の大規模な溝が検出された。さらに平安時代の集落からは多数の竪穴建物の他、溝や鍛冶遺構が検出され、出土遺物では縁軸陶器が多数出土したことが特筆される。

②田口下田尻遺跡・一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

- ・調査期間：平成23年5月1日～平成24年3月31日、平成25(2013)年4月1日～同年8月31日

・整理期間：平成25年4月1日～平成26(2014)年3月31日、同年4月1日～平成27(2015)年3月31日、同年4月1日～平成28(2016)年3月31日、同年4月1日～平成29(2017)年1月31日

- ・報告書刊行：平成29年3月17日

- ・調査成果：①の田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡とは南北方向に走向する国道17号線を挟んだ東側に隣接する。利根川の自然堤防上に立地する古墳時代初頭及び飛鳥・奈良・平安時代の大集落、中・近世の畑、近世の復旧痕などが検出された。集落の中心は10世紀で、竪穴建物の総数は270棟以上となる。集落は、平安時代に急激に拡大した様子が窺える。

③閑根赤城遺跡・一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

- ・調査期間：平成24年4月1日～同年7月31日

- ・整理期間：平成25年4月1日～平成26年1月31日

- ・報告書刊行：平成26年3月14日

- ・調査成果：②の田口下田尻遺跡の南東側に隣接する。利根川左岸の沖積地上に立地する平安時代を中心とする集落遺跡。他に古墳時代後期及び平安時代末～中世の畠、中世の溝や墓壙などが検出された。

1. 旧石器時代

本遺跡周辺では、旧石器時代の遺跡は、近年の上武道路建設に伴う調査の進展によって、遺跡数は増加しつつあるものの、全体的に、分布は希薄である。

本遺跡の南東約1.6kmに位置する青柳町の青柳宿に遺跡(前橋市0013遺跡、第3図11)ではAs-YP下から石器2点が出土した。本遺跡の南東約2.5kmに位置する上細井町の新田上遺跡(前橋市0034遺跡、第3図18)でもAs-YP下から硬質頁岩製と黒色安山岩製の石器109点が出土し、五代町の鳥取福藏寺II遺跡(前橋市0049遺跡、第3図範囲外)でもAs-YP下から硬質頁岩製を中心に石器350点が出土した。また、鳥取町の胴城遺跡(前橋市0023遺跡、第3図範囲外)ではAs-YP下～As-OKIから黒曜石製を中心に石器79点が出土し、本遺跡の南東約1.9kmに位置する上細井町の上細井岬山遺跡(前橋市0015遺跡、第3図12)においてはAs-OKIを含む上部ローム層から硬質頁岩製の削器と剥片の石器2点が出土している。

このように、本遺跡周辺の旧石器時代遺跡は、赤城火山南西麓斜面に立地する比較的新しい時期のものである。

2. 繩文時代

縄文時代になると、本遺跡周辺の遺跡数は多くなる。とくに縄文時代前期の遺跡数が多い。中期以降は減少に転ずる。

縄文時代草創期の遺物は、勝沢町の堤遺跡(第3図範囲外)・小神明町の端気遺跡群湯気遺跡(前橋市0045遺跡、第3図範囲外)・端気遺跡群(第3図範囲外)・小神明勝沢境遺跡(前橋市0046遺跡、第3図範囲外)などから出土している。

縄文時代早期の集落は、渋川市北橘町の城山遺跡(第3図範囲外)で検出されている。当該期の遺物では、上細井町の上細井五十嵐遺跡(前橋市0037遺跡、第3図範囲外)・小神明町の端気遺跡群(前橋市0046遺跡、第3図範囲外)などからは燃糸文土器が、また、上細井町の丑子遺跡(前橋市0038遺跡、第3図範囲外)から条痕文土器が出土しているほか、青柳町の青柳宿上遺跡(第3図範囲外)・本遺跡の南東約1.65kmに位置する引切塚遺跡(前橋市0013遺跡、第3図11)・本遺跡の東南東約2.2kmに位置する上細井町の上細井中島遺跡(前橋市0015遺跡、第3図13)などから早期の遺物包含層や灰が確認されている。

縄文時代前期の集落は、赤城火山南西麓斜面に多く分布しており、本遺跡の北北西約1.05kmに位置する田口町の下庄司原西遺跡・下庄司原東遺跡・上庄司原東遺跡・富士見地区遺跡群陣場遺跡(以上、前橋市0004遺跡、第3図5)・本遺跡の南東約2.2kmに位置する上細井町の上細井蟬山遺跡(前橋市0015遺跡、第3図13)・本遺跡の北東約2.2kmに位置する富士見町の富士見地区遺跡群愛宕山遺跡(前橋市0748遺跡、第3図39)・本遺跡の北約3.5kmに位置する富士見地区遺跡群田中田遺跡(前橋市0749遺跡、第3図40)・上細井町の上細井五十嵐遺跡・芝山遺跡・下箱田向山遺跡(以上、前橋市0037遺跡、第3図範囲外)などから検出されている。

本遺跡の周辺では中期の遺跡数は少ない。本遺跡の南東約2.2kmに位置する上細井町の上細井中島遺跡(前橋市0015遺跡、第3図13)・本遺跡の南東約2.5kmに位置する

新田上遺跡(前橋市0034遺跡、第3図18)・本遺跡の北北西約2.25kmに位置する渋川市北橘町の瓜山遺跡(第3図74)などから集落が確認されている。

後晩期の遺跡も少ない。小神明町の堤遺跡・小神明遺跡群九料遺跡(以上、前橋市0045遺跡、第3図範囲外)・鳥取町の鳥取福藏寺遺跡(前橋市0049遺跡、第3図範囲外)などから後期の集落が検出されている。また、本遺跡の南東約1.65kmに位置する青柳町の青柳宿上遺跡・引切塚遺跡(以上、前橋市0013遺跡、第3図11)から晩期千綱式土器が出土している。

3. 弥生時代

本遺跡周辺における弥生時代の遺跡の数は、縄文時代晩期から継続して少なく、分布も赤城火山南西麓斜面に限られている。後期の遺跡が殆どである。

本遺跡の南東約2.5kmに位置する上細井町の新田上遺跡(前橋市0034遺跡、第3図18)から中期の集落が、小神明町の小神明遺跡群湯気遺跡・倉木遺跡(以上、前橋市0045遺跡、第4図範囲外)から中期～後期の集落が、上細井町の丑子遺跡(前橋市0038遺跡、第3図範囲外)から後期の集落がそれぞれ検出されている。

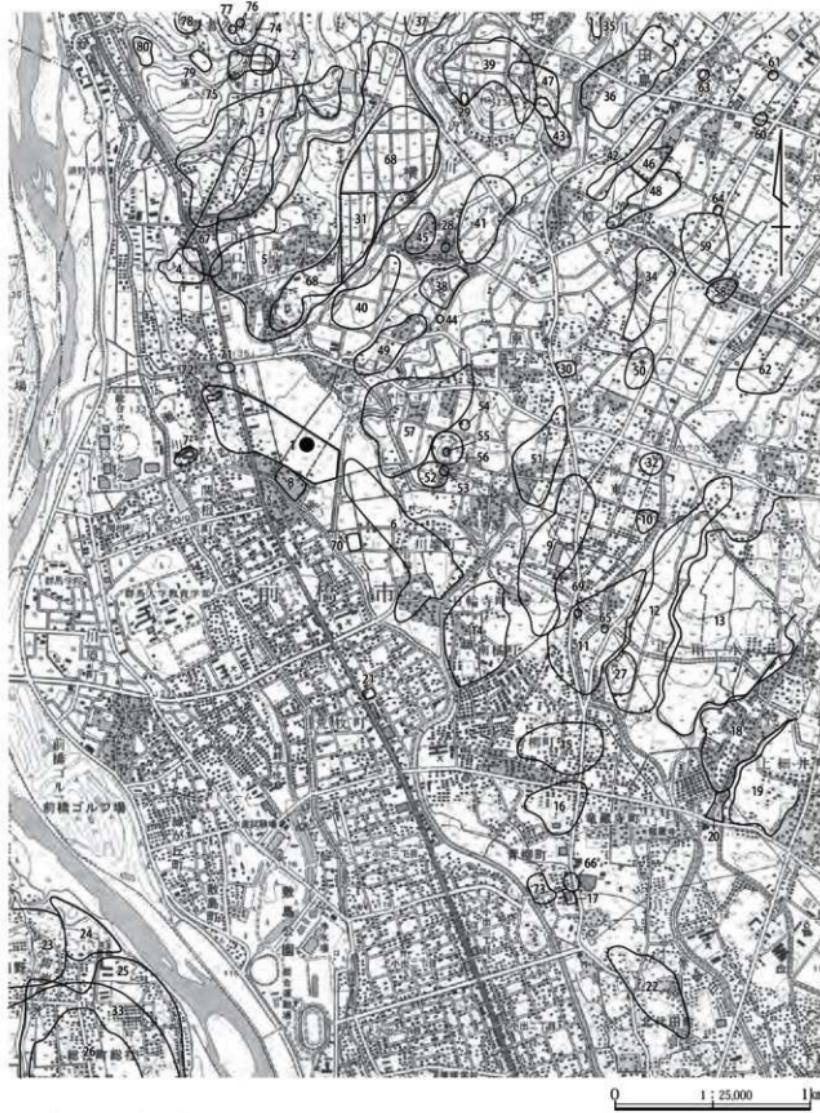
また、本遺跡の南東約1.65kmに位置する青柳町の青柳宿上遺跡(前橋市0013遺跡、第3図11)からは中期の土器が出土している。

本遺跡や田口上田尻・田口下田尻遺跡・関根赤城遺跡など前橋市0008遺跡が位置する旧利根川沿いには、旧石器時代から弥生時代に至る遺跡が現在までのところほぼ皆無と言つて良い状況である。これは本遺跡周辺が、当時の河川敷に当たり、集落を営むに環境ではなかったということを示している。

4. 古墳時代

古墳時代になると再び本遺跡周辺における遺跡数は多くなる。

古墳時代前期の集落は、本遺跡の北西約1kmに位置する田口町の下庄司原東遺跡(前橋市0004遺跡、第3図5)、同じく本遺跡と同じく前橋市0008遺跡の範疇に入る田口町の田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡(第3図1)・本遺跡の南東約1.55kmに位置する青柳町の引切塚遺跡(前橋市0013遺跡、第3図11)・本遺跡の北北西約0.75kmに位



第3図 周辺道路分布図(国土地理院1/25000地勢図「沢川」(平成14年10月1日発行)及び「前橋」(平成22年12月1日発行)を加工)

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1表 周辺遺跡一覧表

	遺跡名・名称	旧市	現市	寺宇	古墳	新平	中近	近代	種別・概要	文献
1 前橋市0000遺跡	開祖神田遺跡		○	○	○				縄文～先秦土坑1、古代溝5・水田2区画、中世溝1。	本報告書
	田川1丁目B遺跡				○	○	○		集落、生産遺跡。吉積＝平安時代築物6棟。塙24、近世復旧6棟等。	6
	田川1丁目C遺跡				○	○	○		集落、生産遺跡。吉積＝平安時代築物5等。	11
	開祖神田遺跡				○	○	○		散布地。	
2 前橋市0001遺跡						○			散布地。	
3 前橋市0002遺跡	岡市遺跡				○				散布地。	
4 前橋市0003遺跡		○	○	○					散布地。	
5 前橋市0004遺跡	千手堂遺跡		○						集落。	
	田川1丁目I遺跡				○				集落、平安時代築物14等。	31
	田川1丁目II遺跡				○				集落、牛舎遺跡、平安時代築物24等。	52
	天神山遺跡		○						集落。	
	八幡山遺跡		○	○					集落。	
	富士見台遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落、開文翌年築物24、平安時代築物13等。	
	下庄川原西遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落、開文翌年築物4、平安時代築物20等。	
	下庄川原東遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落、開文翌年築物6、古墳時代築物10、奈良・平安時代築物41等。	19
	上庄川原西遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落、古墳時代築物6、奈良・平安時代築物6等。	
	上庄川原東遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落、開文翌年築物4、平安時代築物7等。	
	上庄川原北遺跡								集落。	
	不 明									
	米野ノ原遺跡	○	○						散布地、集落。	
6 前橋市0050遺跡	日輪寺御官前遺跡		○	○	○				奈良、平安時代長良川、磐656、源立村築物4、漢13、墓塚1、土坑200、井戸2、島3、旧河道4等。	96
	田端御所遺跡		○	○	○				集落、散布地、生産遺跡。	
	田端山下遺跡		○	○	○				集落。	
7 前橋市0005遺跡	開祖神田遺跡		○	○	○				集落、牛舎遺跡、吉積溝7、水田2、平安時代築物149、溝36、羽笠印3、箭頭1、中近世溝22、サク器8、耕作44等。	13
	前橋市0010遺跡				○				牛舎遺跡、江戸期溝7、溝1等。	41
9 前橋市0011遺跡	知入保坂跡	○	○	○	○				城址。	54
	知久保B遺跡		○	○	○				集落。	23
	知久保C遺跡		○	○	○				集落、古墳時代築物1、中近世溝1等。	23、26
	知久保D遺跡		○	○	○				集落。	27
	知久保E・III遺跡		○	○	○				集落。	31
	知久保F・III遺跡		○	○	○				集落。	30
	不 明								集落。	22、33
	根之郷川上川遺跡	○	○	○					散布地。	33
10 前橋市0012遺跡	根之郷川下川遺跡		○						散布地。	27、29、30
11 前橋市0013遺跡	青柳遺跡								集落、古墳時代築物1。	45
	青柳山下遺跡	○	○	○	○	○	○		集落、旧石器。開文翌年築物1、古墳時代築物29、開文早期辯合器等。	14、45
	引切原遺跡	○	○	○	○	○	○		集落、古墳時代築物29、奈良朝築物3、開文早期辯合器等。	14、35
12 前橋市0014遺跡	引切原Ⅱ遺跡								集落、古墳時代築物2等。	36
	山上・栄道跡群	○	○	○	○	○	○		集落、As-B下水口。	57
13 前橋市0015遺跡	時沢西森林遺跡		○	○	○				集落。	33、34
	時沢北森林II遺跡				○	○			集落。	
14 前橋市0016遺跡	上湖山鶴山遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落、旧石器。開文翌年築物1、平安朝築物25等。	9
	鶴坊道路								集落。	8
15 前橋市0021遺跡	南城東原道路								集落。	53
16 前橋市0022遺跡	吉柳宿前遺跡								集落。	38
17 前橋市0023遺跡	吉柳宿前II遺跡								集落。	39
18 前橋市0024遺跡	吉柳宿前道路								集落、平安時代築物12等。	47
19 前橋市0035遺跡	新山上遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落、旧石器ブロック6、開文翌年築物1口、配石1、古墳時代築物2、平安朝築物1山等。	12
	時沢北山尾崎遺跡								散布地。	31
20 前橋市0036遺跡	時沢北山尾崎								集落。	54
	時沢北山尾崎								集落。	
	時沢北山尾崎								散布地。	
	時沢北山尾崎								散布地。	
	時沢北山尾崎								集落。	
21 前橋市0037遺跡	時沢北山尾崎								集落。	32、34
	時沢北山尾崎								集落。	27
	時沢北山尾崎								集落。	29
22 前橋市0038遺跡	時沢北山尾崎								集落、古墳＝平安時代築物47等。	10
	時沢北山尾崎								集落。	7
	時沢北山尾崎								集落。	
23 前橋市0015遺跡	芳ヶ丘遺跡								集落、平安時代築物14、漢1等。	48
	植野小字土造跡								集落。	5
24 前橋市0116遺跡	鶴山城								城址。	54
	元铁寺谷尾遺跡								城址。	42
25 前橋市0124遺跡	植野城								城址。	42

	道路名・名稱	旧石	縄文	弥生	古墳	新平	中世	近代	備考・歴史	文献
26	前橋市0125遺跡 越村山原敷南遺跡 宝塔山古墳(蛭社村9号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	集落。	44
27	前橋市0126遺跡 南橋村41号古墳 神明山古墳	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 43, 58
28	前橋市0589遺跡 横谷山古墳(富士見村13号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	58
29	前橋市0591遺跡 富士見地区遊跡群初富士古墳 (富士見村7号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 58
30	前橋市0595遺跡 前橋市	○	○	○	○	○	○	○	集落。	21, 58
31	前橋市0596遺跡 城跡	○	○	○	○	○	○	○	城跡。	5
32	前橋市0599遺跡 鬼之山遺跡	○	○	○	○	○	○	○	散在地。	
	鬼之山古墳(蛭社村6号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 58
	鬼之山古墳(蛭社村8号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 37, 58
33	前橋市0603遺跡 安野山古墳(蛭社村9号古墳) 愛宕山古墳(蛭社村10号古墳) 鶴谷山古墳(蛭社村11号古墳) 鶴谷山古墳(蛭社村12号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 46, 58
	鶴谷山古墳(蛭社村13号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 4, 58
	鶴谷山古墳(蛭社村14号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 50, 58
34	前橋市0639遺跡 引田山古墳	○	○	○	○	○	○	○	散布地。	
35	前橋市0725遺跡 引田山原道跡 引田山原道跡三反田遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落。 開文町六建物1, 平安町六建物1等。	28, 29
	引田山原道跡三反田遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落。	15
	引田山原道跡	○	○	○	○	○	○	○	散在地。	
	富士見地区遊跡群引田山遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落。 開文町六建物2, 平安町六建物4等。	20
36	前橋市0726遺跡 富士見地区遊跡群引田山遺跡 富士見地区遊跡群引田山遺跡 引田山原道跡	○	○	○	○	○	○	○	集落。 開文町六建物2, 平安町六建物23, 桜丘町建物10等。	18
	引田山原道跡	○	○	○	○	○	○	○	その他の。	
37	前橋市0727遺跡 米野山町道路	○	○	○	○	○	○	○	散布地。	
38	前橋市0741遺跡 横谷山遺跡	○	○	○	○	○	○	○	城跡。 その他の。	54, 55
	富士見地区遊跡群南古墳遺跡	○	○	○	○	○	○	○	城跡。 その他の。 中世迄漢4等。	47
39	前橋市0745遺跡 富士見地区遊跡群愛宕山古墳	○	○	○	○	○	○	○	集落。 生産。 開文町六建物12, 玉丸150, 平安庭1等。	21
	富士見地区遊跡群愛宕山古墳	○	○	○	○	○	○	○	生産過程。 近世様石跡。	
40	前橋市0749遺跡 横谷山古墳	○	○	○	○	○	○	○	生産遺跡。	26
	富士見地区遊跡群山田山古墳	○	○	○	○	○	○	○	集落。 開文町六建物9, 古墳町六建物61, 清1等。	16
41	前橋市0750遺跡 富士見地区遊跡群山田山古墳	○	○	○	○	○	○	○	集落。 開文町六建物2, 配石1等。	17
42	前橋市0751遺跡 富士見地区遊跡群白川遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落。 開文町六建物6, 古墳町六建物1, 奈良・平安町六建物13等, 開文町六建物2, 開文町六建物20, 奈良・平安町六建物14, 桜丘町建物11等。	18
43	前橋市0752遺跡 森山古墳(富士見村6号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 58
	森山古墳(富士見村6号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	58
44	前橋市0753遺跡 飛行山古墳(富士見村14号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 15, 58
45	前橋市0754遺跡 破壊石井跡	○	○	○	○	○	○	○	散布地。	15, 30, 58
46	前橋市0755遺跡 山鳥城	○	○	○	○	○	○	○	城跡。	54, 58
47	前橋市0756遺跡 富士見地区遊跡群日向遺跡	○	○	○	○	○	○	○	城跡。	21, 58
	森山城(引田城)	○	○	○	○	○	○	○	城跡。	55, 58
48	前橋市0757遺跡 日向1丁目遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落。 散布地。	
49	前橋市0758遺跡 黒土山地区遊跡群日向遺跡	○	○	○	○	○	○	○	散布地。	
	破壊石井跡	○	○	○	○	○	○	○	集落。 開文土坂3, 古墳町11号, 新良平安庭15など。	17
50	前橋市0759遺跡 原之郷櫛形古墳	○	○	○	○	○	○	○	集落。 平安庭12, 桜1など。	25
	原之郷1丁目遺跡	○	○	○	○	○	○	○	城跡。	
51	前橋市0760遺跡 原之郷東原古墳	○	○	○	○	○	○	○	集落。	22
52	前橋市0761遺跡 原之郷善寺古墳	○	○	○	○	○	○	○	集落。	27
53	前橋市0762遺跡 富士見村1号古墳 原之郷1ノ後遺跡	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	58
54	前橋市0763遺跡 原之郷1ノ後遺跡	○	○	○	○	○	○	○	散布地。	
55	前橋市0764遺跡 九十九山古墳(富士見村16号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 58
56	前橋市0765遺跡 金山城	○	○	○	○	○	○	○	城跡。	5
58	前橋市0767遺跡 小笠山古墳遺跡	○	○	○	○	○	○	○	城跡。	54
59	前橋市0769遺跡 原之郷阿久今遺跡	○	○	○	○	○	○	○	集落。 古墳遺1。 平安町六建物2, 中道世遺1等。	24
60	前橋市0770遺跡 田島自然林遺跡	○	○	○	○	○	○	○	散布地。	
61	前橋市0776遺跡 上二郎野	○	○	○	○	○	○	○	城跡。	
62	前橋市0777遺跡 時計山古道跡	○	○	○	○	○	○	○	遺見。	
63	前橋市0778遺跡 田崎古水道跡	○	○	○	○	○	○	○	散布地。	
64	前橋市0779遺跡 鹽塙原山(富士見村15号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 58
65	前橋市0783遺跡 山上1号遺跡群	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	57, 58
66	前橋市0845遺跡 吉澤古跡遺跡	○	○	○	○	○	○	○	生産遺跡。 水田。	47
	鬼塚古跡	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	45, 58
	田口冠木遺跡・田口冠木道路1号古墳 (南橋村2号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 40, 58
67	前橋市0846遺跡 富士見村28号古墳	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	
	南橋村35号古墳	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	
	美治山古墳	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	
	美治山古墳B(南橋村34・36・37号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	3, 58
	美治山古墳C	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	
	冠木古塚跡A(南橋村16~22号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	
	冠木古塚跡B(南橋村24~26号古墳)	○	○	○	○	○	○	○	古墳。	

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

	遺跡名・名稱	旧石	縄文	弥生	古墳	新平	中世	近代	種別・難易度	文献
	商崎43号古墳				○				古墳。	
	下庄原1号古墳・露土見村孤塚古墳 (露土見村付近古墳)				○				古墳。	
	上庄原1号古墳(露土見村8号古墳)				○				古墳。	
	上庄原2号古墳(露土見村9号古墳)				○				古墳。	
	上庄原3号古墳				○				古墳。	
	上庄原4号古墳(露土見村10号古墳)				○				古墳。	
68	前橋市OB47遺跡				○				古墳。	
	神闇2号古墳				○				古墳。	
	露土見地区遺跡群 神闇遺跡				○				古墳。円墳2。	
	上庄原西遺跡				○				古墳。周溝塁1。	19, 58
	上庄原東遺跡				○				古墳。円墳2。	
	上庄原北遺跡				○				古墳。円墳1。	
	田口八幡1遺跡				○				古墳。円墳1。	51, 58
					○				古墳。	58
69	前橋市OB58遺跡				○				古墳。	
	引切原古墳(南橋村40号古墳)				○				古墳。	35, 58
	引切原道路				○				古墳。	
70	前橋市OB65遺跡				不 明				散布地。	42
71	前橋市OB61遺跡				不 明				生産、その他。	
72	前橋市OB613遺跡	田口上山田C遺跡			○				水田、牛糞。	6
73	前橋市OB614遺跡	吉澤商店				○			城郭。	
74	前橋市OB614遺跡	瓜山遺跡			○	○			散布地。集落。園文式六連物2等。	1, 2
75	前橋市OB608遺跡	鶴崎遺跡			○				散布地。	
76	前橋市OB603遺跡				○				古墳。	
77	前橋市OB603遺跡				○				古墳。	
78	前橋市OB603遺跡				○				散布地。	
79	前橋市OB603遺跡				○				散布地。	
80	前橋市OB602遺跡				○				散布地。	

文献

1	北埼玉教育委員会1960「東峰遺跡・瓜山遺跡」
2	北埼玉教育委員会2000「古戸村東山遺跡・薄
3	前橋市1938「上毛の考古学観察」
4	群馬県史編さん委員会 1981「群馬歴史・資料編」
5	群馬県教育委員会 1988「群馬県の中世城郭跡」
6	群馬県埋文化財調査委員会2012「田口上山田遺跡・HID1下山田遺跡」。同2017「HID1下山田遺跡」
7	群馬県埋文化財調査委員会2013「久保益塚」
8	群馬県埋文化財調査委員会2013「上郷鶴山遺跡」
9	群馬県埋文化財調査委員会2013「上郷山の鳥遺跡」
10	群馬県埋文化財調査委員会2013「上町・時立小山遺跡(谷ノ山)遺跡」
11	群馬県埋文化財調査委員会2014「開城城跡・谷ノ山遺跡」
12	群馬県埋文化財調査委員会2014「御山遺跡」
13	群馬県埋文化財調査委員会2015「開城城跡・虎頭城」
14	群馬県埋文化財調査委員会2015「引切原遺跡・百神室上遺跡」
15	群馬県埋文化財調査委員会1979「露土見村・古墳群」
16	群馬県教育委員会1985「田中山遺跡・谷谷ノ山遺跡・河原山遺跡」
17	群馬県教育委員会1987「露土見地区遺跡群・向吹山遺跡・田中城跡・野之下遺跡・荷山遺跡」
18	群馬県教育委員会1989「露土見地区遺跡群・白川遺跡・山森遺跡・久保山遺跡」
19	群馬県教育委員会1991「露土見地区遺跡群・神跡・住吉(古墳群)」
20	群馬県教育委員会1991「露土見地区遺跡群・赤城遺跡・長泉寺遺跡」
21	群馬県教育委員会1991「露土見地区遺跡群・愛宕山遺跡・初室古墳・鷹の巣遺跡・日向遺跡」
22	群馬県教育委員会1997「平成8年度付村内遺跡」
23	群馬県教育委員会1998「旭保保山遺跡」
24	群馬県教育委員会1998「小字の鳴遺跡」
25	群馬県教育委員会1998「露之郷遺跡」
26	群馬県教育委員会1998「平成9年度付村内遺跡」
27	群馬県教育委員会1999「平成10年度付村内遺跡」
28	群馬県教育委員会2001「引山高麗遺跡」
29	群馬県教育委員会2001「平成12年度付村内遺跡」
30	群馬県教育委員会2002「平成13年度付村内遺跡」

31	露土見村教育委員会2004「平成15年度付村内遺跡」
32	露土見村教育委員会2006「山門付付村内遺跡」
33	露土見村教育委員会2007「時沢付付村内遺跡」
34	露土見村教育委員会2008「平成16~17年度付村内遺跡」
35	前橋市教育委員会1985「引切原遺跡」
36	前橋市教育委員会1985「引切原付付村内遺跡」
37	前橋市教育委員会1986「山内遺跡付掘調査報告書」
38	前橋市教育委員会2000「山内遺跡付掘調査報告書」
39	前橋市教育委員会2003「山内遺跡付掘調査報告書」
40	前橋市教育委員会2004「年報」35
41	前橋市教育委員会2007「山内遺跡付掘調査報告書」
42	前橋市教育委員会2008「山内遺跡付掘調査報告書」
43	前橋市教育委員会2009「山内遺跡付掘調査報告書」
44	前橋市教育委員会2009「年報」40
45	前橋市史編さん委員会1971「前橋市史」1
46	前橋市文化財研究会1975「蛇山古墳調査概要」
47	前橋市埋文化財付掘調査会1984「青幡古墳調査」
48	前橋市埋文化財付掘調査会1989「西沢古墳」
49	前橋市埋文化財付掘調査会1996「延喜式古山古墳」
50	前橋市埋文化財付掘調査会1998「福山古墳」
51	前橋市埋文化財付掘調査会2000「山門八幡櫓」遺跡
52	前橋市埋文化財付掘調査会2000「山門八幡櫓」遺跡
53	前橋市埋文化財付掘調査会2008「南船東原遺跡」
54	山崎一1971「群馬県古墳墓誌の研究(上)」
55	山崎一1979「群馬県古墳墓誌の研究(下)遺跡編上」
56	群馬県埋文化財付掘調査会2013「日輪寺古墳群古跡」
57	群馬県埋文化財付掘調査会2016「山王・柴道跡」
58	群馬県教育委員会2017「群馬古墳総観」

*上記文献以外に群馬県地図情報システム「マッピングぐんま 遺跡マップ」(<http://mapping.gunma.pref.gunma.jp/pref/gunma-seki/Portal>)を参照した。

置する富士見町の富士見地区遺跡群田中田遺跡(前橋市0749遺跡、第4図40)などで確認されている。また、本遺跡の北北西約0.9kmに位置する田口町の上庄司原西遺跡(前橋市0004・0847遺跡、第3図5・68)からは集落に近接して周溝墓も検出されている。本遺跡の南東約3.3~3.8kmに位置する青柳町の山王・柴遺跡群(前橋市0013・0014遺跡、第3図11・12)からはAs-C降下時期前後の古墳4群が確認されており、古墳時代初頭の生産域の存在を示すものである。

中期の集落は、本遺跡と共に前橋市0008遺跡の範疇に入る田口町の田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡(第3図1)、本遺跡の北北東約0.8kmに位置する富士見町の富士見地区遺跡群田中田遺跡(前橋市0749遺跡、第3図40)などから検出されている。

後期の集落は、本遺跡の北西約1kmに位置する田口町の下庄司原東遺跡(前橋市0004遺跡、第3図5)、本遺跡と同じ前橋市0008遺跡の範疇に入る田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡(第3図1)、本遺跡の南東約1.7kmに位置する青柳町の青柳宿上遺跡・引切塚遺跡(ともに前橋市0013遺跡、第3図11)、本遺跡の南東約1.15kmに位置する日輪寺町の南橋東原遺跡(前橋市0016遺跡、第3図14)、本遺跡の北北東約0.8kmに位置する富士見町の富士見地区遺跡群田中田遺跡(前橋市0749遺跡、第3図40)などから確認されている。

一方、古墳は、まず、本遺跡の北東約2.75kmに位置する上細井町の山王・柴遺跡群(前橋市0783遺跡、第3図63)から方墳と小石槨墓が確認されている。方墳の主体部は削平され失われていたが、周溝内にHr-FAの堆積が確認され、5世紀後半~6世紀初頭頃のものと推定される。他に、6世紀前半の前方後円墳である富士見町の九十九山古墳(富士見村16号古墳、前橋市0764遺跡、前橋市指定史跡、第3図範囲外)、6世紀後半~7世紀の円墳の横穴式石室の一部が検出された本遺跡の北東約2.75kmに位置する上細井町の山王・柴遺跡群(前橋市0783遺跡、第3図63)、後期の円墳が群集する田口町の陣馬・庄司古墳群(前橋市0847遺跡、第3図65)、同じく後期の円墳である本遺跡の南東約2.55kmに位置する青柳町の引切塚古墳(前橋市0858遺跡、第3図66)などがある。

5. 奈良・平安時代

律令制下の上野国内には、当初、碓氷・片岡・甘楽・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽の13郡が置かれていたが、『続日本紀』和銅4(711)年3月辛亥(6日)条や、高崎市吉井町池に現存する多胡碑碑文に見えるように、和銅4年に甘楽郡・片岡郡・緑野郡から割かれた300戸によって多胡郡が新たに設置され14郡となった。

前橋市域は、ほぼ利根川左岸側が勢多郡、利根川右岸側が群馬郡に当たっているものと考えられ、本遺跡は群馬郡と勢多郡との郡境付近に所在していたものと考えられる。平安時代中期に成立した『和名類聚抄』によれば、勢多郡には深田、田邑、芳賀、桂萱、真壁、深渠、深澤、時澤、藤澤の9郷が存在した。本遺跡の北側には渋川市北橋町真壁、南東側には前橋市富士見町時沢という、勢多郡内の郷名に由来すると考えられるような地名が遺存している。

本遺跡の南西側から南側に位置している前橋市荒牧町は、その地名から古代の牧の所在地に比定されている。上野国については、すでに天平6(734)年尾張國正税帳に6月に上野国に下る種馬10頭に秣25束を支出したことが記されており、早くもこの時期には官牧が設置されていたことがわかる。また先掲した『延喜式』左馬寮御牧条によれば、御牧として、利刈・有馬島・沼尾・拝志・久野・市代・大藍・鹽山・新屋の9牧が設置されており、同式年貢条によれば、毎年50疋が京進されることになっていた。また、『政事要略』巻23年中行事8月下旬にみえる「廿八日上野勅旨御馬事」の割注には、前掲の9御牧の他にさらに「小栗田」「平澤」の2牧の名があげられており、9御牧の他にもそれに準ずるような官牧が存在していたことがわかる。

『富士見村誌』続編では、拝志莊関係史料が分布する旧細ヶ沢川以西の赤城火山南西麓から西麓にかけての広大な地域を拝志莊と推定している。本遺跡の付近では、近世の史料ではあるが、1770(明和7)年の日輪寺棟札に「上野國勢多郡林正日輪寺村」とあり、日輪寺町周辺に「林」=「拝志」の地名が遺っていたことが判明する。また、本遺跡の南東約0.4kmに位置する日輪寺町の日輪寺觀音前遺跡(前橋市0903遺跡、第3図6)からは「林」と記された

10世紀後半代の墨書き器が出土しており、本遺跡に近接した場所に、上野国内に設置された古代の9箇所の御牧の一つである拝志牧が所在した可能性が高い。

『延喜式』左馬寮諸国所貢飼馬牛条には、上野国から年に馬45疋が兵部省に貢進されると規定されているが、年貢御馬50疋とあわせると合計95疋ということになり、年貢御馬と所貢飼馬の合計数は全国最多である。また、上野国はしばしば律令国家の征夷戦争の兵站基地として、兵士・軍馬・革甲等の調達地とされていた。そのような状況下、上野国の官牧は、元来、律令国家が必要とする馬の最大級の供給源の一つであった。

本遺跡では縄釉・灰釉陶器の出土こそないものの、本遺跡と同じ前橋市0008遺跡の範囲に入る田口上田尻・田口下田尻遺跡(第3図1)は、古代の大規模集落で、195点もの縄釉陶器が出土している。縄釉陶器の出土量では、それまで県内最多であった前橋市天神遺跡(178点)等を上回る量であり、さらに周辺遺跡から多くの施釉陶器が出土している。本遺跡の南東約0.6kmに位置する日輪寺觀音前遺跡(前橋市0903遺跡、第3図6)からも、上野国府周辺集落である前橋市稻荷台道東遺跡の2倍近い量の灰釉陶器が出土しており、田口上田尻・田口下田尻遺跡における灰釉陶器の出土量とも近似し、灰釉陶器の出土量では当該期の一般的な集落における出土量を大幅に上回っている。

本遺跡周辺地域において9世紀後半から急速に集落が拡大している現象を富豪層による空閑地開発の結果を見て、本遺跡及び周辺地域からの施釉陶器大量出土の理由を、富豪層によって非日常の供膳具として導入された施釉陶器が、豊穴建物に居住するような民衆層に再分配された結果と捉える見方もあるが、本遺跡周辺地域における卓越した施釉陶器の出土状況等を勘案するならば、本遺跡の周辺に、官牧のような公的な施設が存在し、その影響が及んでいるものと考えておきたい。

本遺跡周辺において古墳時代から継続して営まれている集落遺跡としては、先述の田口町の田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡(以上前橋市0008遺跡、第3図1)の他、本遺跡の東南東約1.25kmに位置する富士見町の旭久保遺跡(前橋市0011遺跡、第3図9)、本遺跡の南東約1.2kmに位置する日輪寺町の南極東原遺跡(前橋市0016遺跡、第3図14)、本遺跡の南東約5kmに位置する川端町の川

端根岸遺跡(前橋市0903遺跡、第3図6)などが存在している。

奈良時代以降の集落としては、本遺跡の南東約5kmに位置する川端町の閑根細ヶ沢遺跡・川端山下遺跡(以上前橋市0903遺跡、第3図6)などが上武道路の建設に先だって調査されている。また、それらと同じ前橋市0903遺跡の範囲に含まれる先掲の日輪寺觀音前遺跡(第3図6)からも9世紀前半から中葉にかけての大規模方形区画や9~10世紀の集落・墓塚等が検出されている。大規模方形区画は官衙や居館等の何らかの施設の存在を示唆する。

なお、本遺跡と同じ前橋市0008遺跡の範囲に入る田口町の田口下田尻遺跡(第3図1)では7世紀及び10世紀の鍛冶遺構が、また、本遺跡の約2.75km南東に位置する上細井町の王久保遺跡・上町時沢西堀屋谷戸遺跡(以上前橋市0035遺跡、第3図19)では9世紀の鍛冶遺構が、さらに、本遺跡の南側に隣接する閑根町の閑根赤城遺跡(前橋市0008遺跡、第3図6)では10~11世紀の鍛冶遺構が、それぞれ集落と共に検出されている。赤城山南麓ではこれらの諸遺跡以外でも前橋市富士見町から大胡町にかけての地域において古代の鍛冶遺構の検出が少なくなく、山麓の斜面を利用して馬の放牧地などが存在していた可能性が想定出来る。

また、本遺跡の南東約2.5kmに位置する上細井町の新田上遺跡(前橋市0034遺跡、第3図18)では、集落と集落の中心を東西に走る道路状遺構の検出が特筆される。また、青柳町の青柳寄居遺跡(前橋市0843遺跡、第3図範囲外)からは平安時代の水田と、その下層から集落が検出されている。本遺跡の南東約1.6~1.8kmに位置する青柳町の山王・柴遺跡群(前橋市0013・0014遺跡、第3図11・12)からは天仁元(1008)年降のAs-B混土下、及びさらに下層から水田が検出されている。

なお、本遺跡の南東約0.6kmに位置する日輪寺は、弘仁2(811)年の建立との伝承を有する古刹である。創建年代を証するような遺構・遺物は検出されていないものの、寺に伝わる平安時代後期作の十一面觀音立像は優品で、県指定重要文化財である。

6. 中世

天仁元(1008)年の浅間山大噴火に伴うAs-B降下後、

上野国内では荘園開発が活発になる。新田郡のはば全域に及ぶ新田荘などはその代表的な事例である。

先述したように、本遺跡周辺は拝志莊（林莊）または青柳御厨の領域に含まれていた可能性が高い。拝志莊は、成立年代は不明ではあるが、鎌倉期と推定される年月日不詳の宣陽門院（觀子内親王、1181（養和元）年～1252（建長4）年、後白河天皇第6皇女）所領目録（烏田文書、『群馬県史 資料編』6所収）に見え、建久2（1191）年に後白河院が膨大な荘園を院御所六条殿内に建立された法華長講弥陀三昧堂（長講堂）に寄進したことによって成立した中世荘園公領制下における王家領莊園群の一つで、後白河法皇から宣陽門院に譲られた際には42箇国89箇所に及び、その後、鎌倉時代末期には180箇所にまで増大したが（『梅松論』）、南北朝内乱及び応仁の乱などの混亂によって不知行が急増し、戦国時代には急速に解体した長講堂領に加えられていたことが判明している。

また、戦国期の年月日不詳の上野国守護職上杉家所領目録（彦部文書、『群馬県史 資料編』7所収）にも見える。

『富士見村誌』（統編（1979年））では、拝志莊関係史料が分布する旧・細ヶ沢川以西の赤城火山南西麓から西麓にかけての広大な地域を拝志莊と推定している。とくに本遺跡の南東約0.6kmに位置する日輪寺には、近世のものではあるが、「上野國勢多郡林正日輪寺村」と記された（明和7（1770）年銘の棟札があり、本遺跡周辺に「林=拝志」の地名が遺っていたことが判明する。また、先述のように日輪寺観音前遺跡から検出された墓墳からは「林」と記された墨書き土器が出土していることも、本遺跡周辺に拝志莊が存在していたことの傍証となる。

一方、青柳御厨は、建久3（1192）年8月付け伊勢大神宮神主請文（神宮文庫蔵神宮難書、『群馬県史 資料編』6所収）に見え、平安末期の長寛年間（1163～1165）に成立した伊勢神宮の御厨で、『南橋村誌』（1955年）では、神明宮・伊勢宮や伊勢地名の分布から、前橋市荒牧町・日輪寺町付近から前橋市青柳町を中心とした赤城白川扇状地地域を青柳御厨の故地と推定している。

『神鳳鈔』（伊勢神宮内宮および外宮の領地の諸国一覧表、建久4（1193）年に原本の書き出しを始め、その後追記がなされ、延文5（1360）年完成）に、建永年間（1206～1207）に官符が出され、その規模は田80町であったことが見える。また、『氏經卿神事日次』（室町時代の伊勢

神宮禰宜荒木田氏経（1402（応永9）～1487（文明19））の述作。後世、神職たちの神事・所作の扱り所となった）には、貞和3（1347）年と宝徳4（1452）年に青柳御厨関係文書が遠江国蒲御厨内安間郷関係文書とともに焼失し、紛失状が作成されたことが記されている。これらの他に、勢多郡内には大室莊、大胡莊、細井御厨、山上保などの存在が記録されている。

在地豪族として古代末期より秀郷流藤原氏を称した大胡氏、山上氏などの活動が見え、鎌倉幕府成立後は共に御家人となっている。

勢多郡の中央に聳える赤城山は、当郡における信仰の中心であり、赤城神社は当郡を中心に広く分布している。なお『吾妻鏡』建長3（1251）年4月26日条に「赤木岳燒」という記事があり、この時期に赤城山の噴火を想定する見方もあるが、対応するような火口や、この時に降下したと見られるような火山噴出物が同定されている訳ではない。『神道集』には、赤城三所明神の由来を物語る説話を掲載されており、この頃に赤城山信仰は集大成されたと考えられている。また、赤城山南面の粕川を中心とする一帯には南北朝期から室町期にかけて赤城塔と称する特異なスタイルの石造宝塔が分布し、赤城信仰との関連が想定されている。戦国時代には赤城神社に対する武将たちの尊崇がさらに高まり、多くの武将たちが願文や書状を寄せている。

享徳3（1455）年、鎌倉公方足利成氏による関東管領上杉憲忠暗殺に端を発し、文明14（1483）年までの間、関東一円で幕府、鎌倉公方（古河公方）、堀越公方、山内上杉氏、扇谷上杉氏らが相争った享徳の乱以後、関東地方は戦国時代に入る。本遺跡周辺にもこの時期の城館が存在する。『富士見村誌』（統編）では、本遺跡の北約1.2kmに位置する富士見町の陣馬遺跡（前橋市0596遺跡、第3図31）を文明9（1477）年に太田資長が長尾景春と対峙した時の陣跡とする。

戦国期、勢多郡東部地域は新田金山城（現・太田市金山町）に據る由良氏の勢力下に入り、山上城（現・桐生市新里町）の山上氏、膳城（現・前橋市柏川町）の善氏らが従った。一方、勢多郡西部地域は、膳城に拠った長野氏が台頭し、大胡郷もその支配下となった。天文20（1551）年には長野氏は那波氏、下野国の佐野氏などと共に金山城を攻めているが、永禄3（1560）年、長尾景虎

が関東に進出すると、由良氏(金山衆)、長野氏(履橋衆)共にこれに従い、履橋城には長尾景虎の臣である北条(きたじょう)高広が入った。北条高広は、その後、一時期小田原北条氏配下となるも、再び越後上杉氏配下に帰参し、謙信死後は甲斐武田氏に従うが、天正10(1582)年に武田氏が織田氏に滅ぼされると、関東支配を命じられて履橋城に入った織田氏の部将・滝川一益に降した。

本能寺の変の直後に起こった天正壬午の乱で滝川一益率いる織田勢が神流川の戦いで小田原北条氏勢に大敗し、織田氏の勢力は関東から退去了した。滝川一益に従っていた北条高広も小田原北条氏に降伏して大胡城に退去了した。また金山城の由良氏も小田原北条氏の侵攻に敗れ、上野国はそのほぼ全域が小田原北条氏の支配下となったのである。

本遺跡周辺には、長尾氏や桐生氏系の地侍が共同して構える陣地に限定して用いられる呼称である「寄居」が点在している。本遺跡の南西約0.2kmに位置する閑根町の閑根寄居(前橋市0010遺跡、第3図8)、本遺跡の北東約1kmに位置する富士見町の横室寄居(前橋市0741遺跡、第3図38)、本遺跡の南東約1.4kmに位置する青柳町の青柳寄居(前橋市0943遺跡、34図69)などが分布し、とくに本遺跡周辺のものは長尾氏に関係する地侍たちのものと考えられる。その他、本遺跡周辺には、本遺跡の南東約2.8kmに位置する上細井町の八幡山の砦(前橋市0036遺跡、第3図20)、本遺跡の北東約2.2kmに位置する富士見町の田島城(前橋市0755遺跡、第3図46)・森山城(引田城とも、前橋市0756遺跡、第3図47)、本遺跡の北東約0.8kmに位置する富士見町の九十九山の砦(前橋市0765遺跡、34図54)、本遺跡の東北東約0.6kmに位置する富士見町の金山城(前橋市0766遺跡、第3図55)などの16～17世紀頃の砦や城塞跡がいくつも点在している。

7. 近世・近代

天正18(1590)年の徳川家康関東入部により、勢多郡では大胡城に牧野康成が封じられ、元和2(1616)年まで大胡藩が存続した。大胡藩廃藩後、大胡藩領は前橋藩領に併合された。それまで、前橋藩領は主に利根川沿いに設定されていた。

「寛文郷帳」によると、勢多郡は寺社領を除いて5万7643石余、137箇村で、田方3万2千574石余、畠方2万

5千68石余で、田方が約56.5%を占めている。内訳は、前橋藩領が5万565石余、幕府領2千909石、館林藩領2千470石、旗本2氏領計1000石、沼田藩領698石、寺社領9箇所計290石余であり、約9割が前橋藩領であった。その後の前橋藩の変遷によって、陸奥国磐城泉藩領、山城国淀藩領、武藏国岩槻藩領、下野国佐野藩領、出羽国松山藩領などに分かれ、錯綜している。

なお、「元禄郷帳」では6万519石・176箇村、「天保郷帳」では7万7千365石・178箇村、「旧高旧領」では7万7千364石余・180箇村となっており、江戸時代を通じて勢多郡は石高・村数とともに増加傾向にあったと言えよう。

近世から近代初頭にかけての閑根村は、北は田口村、北東は原之郷、東は川端村、南は荒牧村、西の利根川対岸は塗原村(現・吉岡町)等に囲まれた村であった。「寛文郷帳」に「田方215石2斗余・畠方205石8斗余」とあり、「元禄郷帳」も同高、「天保郷帳」では492石余、「旧高旧領」でも同高である。なお、寛保2(1742)年の村高は491石余、他に寅～戌の新田7斗余(『前橋市史』2)がある。

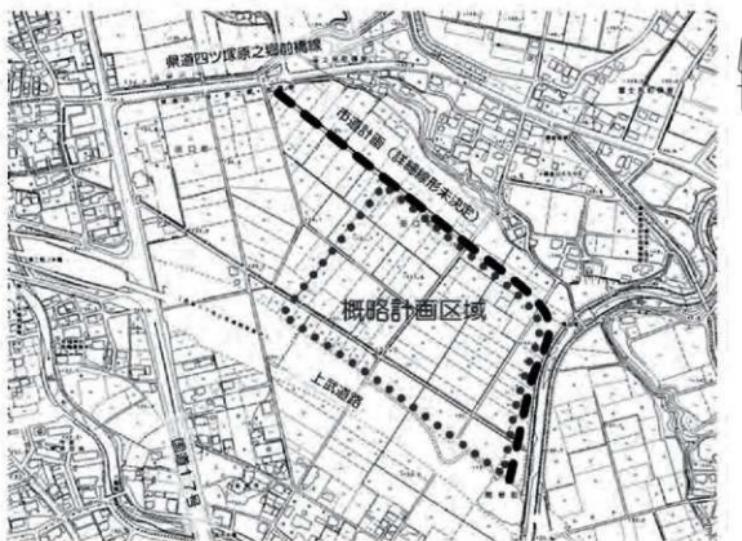
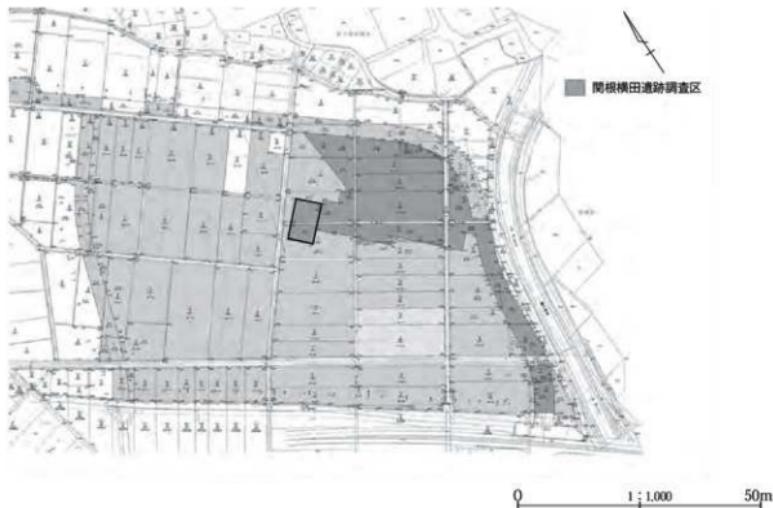
寛保2(1742)年の「諸職人元帳」では、村内に木挽1、大工1が見え(『勢多郡誌』)、安永4(1775)年の「沼田煙草伊勢崎町市売紛争裁許請書」(閑文書)によれば8人の売方商人の内に当村の藤助がいることがわかる。

天明3(1783)年の浅間山噴火により、当村においても「田畠泥入」の被害を受けている(『浅間嶽燒荒記』)。

天保13(1842)年には人別237人に對し、麦253石5合を今年より70年割で蓄えると決定している(『社倉積石御請書』閑根町有文書)。

明治10(1877)年頃の田は28町7反余・畠47町2反余、民業は「男農桑業トスル者70戸、女養蚕製糸ヲ以テ業トスル者90人」で、牡馬28・牝馬6、物産として蘭420貫、米穀120石、生糸92貫400匁があるという(『上野国郡村誌』)。

明治4(1871)年前橋県、群馬県を経て、明治6(1873)年熊谷県、明治9(1876)年群馬県、明治11(1878)年群馬県南勢多郡に屬し、明治22(1889)年に南櫛村の大字となつた。



第4図 調査区位置図(前橋市はか「前橋市新設道の駅整備事業基本計画概要版」平成30年10月掲載の図「道の駅の計画地」を加1)

参考文献

- 青木裕美ほか2012『戦国史－上州の150年戦争－』上毛新聞社
 井上定幸・近藤義雄・西畠晴次編1988『角川日本地名大辞典』10群馬県
 国研会2011「日輪寺蔵造木一面貌音普建立像」(『国草』1983)
 北橘村誌編纂委員会1975『北橘村誌』
 京都市立大学文学部国語学国文学研究室編1968『諸本集成後名類聚抄』本文篇
 龍川書店
 熊谷市編2018『熊谷市史 通史編上巻 原始・古代・中世』
 群馬県編1938『上毛古墳縞鑑』
 群馬県教育委員会編1988『群馬県の中世城館跡』
 群馬県教育委員会編2017『群馬県古墳紀要』
 群馬県史編纂委員会編1981『群馬県史』資料編3
 群馬県史編纂委員会編1988『群馬県史』資料編2
 群馬県史編纂委員会編1990『群馬県史』通史編1
 群馬県史編纂委員会編1990『群馬県史』資料編6
 群馬県史編纂委員会編1990『群馬県史』資料編7
 群馬県総務部市町村課編2015『平成27年度群馬県市町村要覧』
 群馬県文化事業振興会1977『上野国郡村志』1
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2012『田口上田尻遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2014『根岸赤城遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2015『新田上遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2015『関根韃ヶ越遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2015『引切塚遺跡、青柳宿上遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2016『川端根岸遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2017『田口下田尻遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2017『日輪寺鏡音前遺跡』
 (公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団編2021『年報』38
 京都市立大学文学部国語学国文学研究室編1968『諸本集成後名類聚抄』本文篇
 龍川書店
 助勢市誌編纂委員会編1958『勢多郡誌』
 前橋市教育委員会編2013『前橋市道路分布地図』
 前橋市史編纂委員会編1971『前橋市史』1～3
 富士見村誌編纂委員会編1954『富士見村誌』
 山崎一1972『群馬県古城堡系の研究』下 群馬県文化事業振興会
 マッピングぐんま・道路まっぷ
<http://mapping.gunma.pref.gunma.jp/pref/gunma-iseki/Portal>

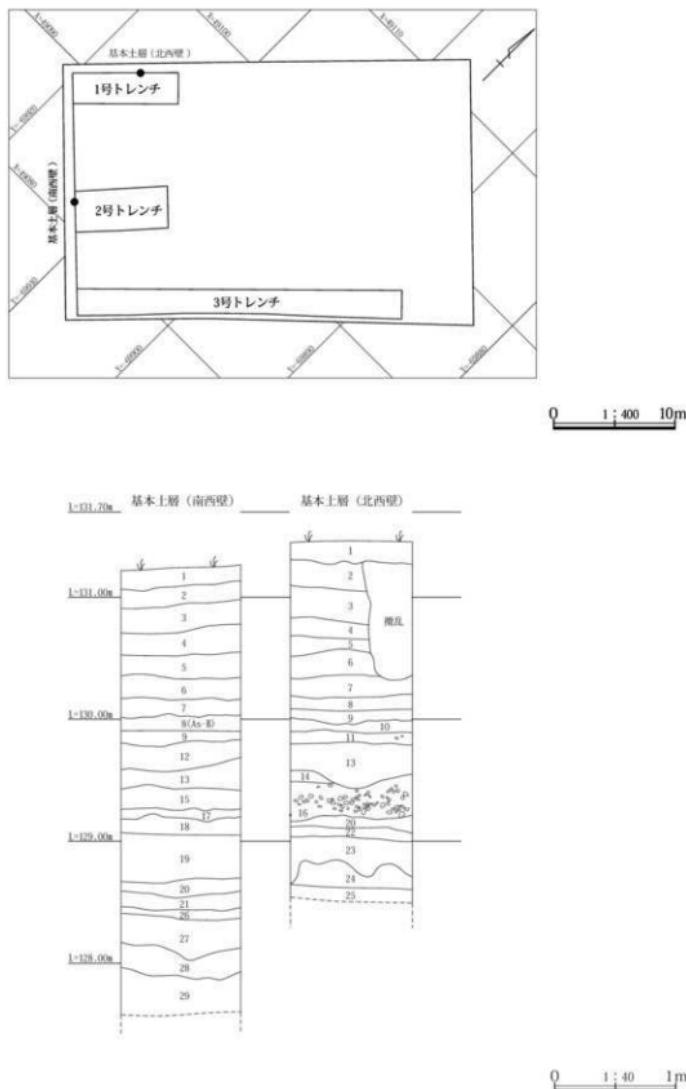
第3節 基本土層

基本土層は、北西壁及び南西壁(記録箇所は第5図に図示)において記録した。

北西壁・南西壁基本土層

- 1 表土
- 2 褐灰色土(10YR5/1)白色軽石、鉄分凝縮ブロックを全体に含む。
- 3 灰白色土(10YR8/1)白色軽石、鉄分凝縮ブロックを少量含む。
- 4 灰白色土(10YR8/1)白色軽石、鉄分凝縮ブロックを多量に含む。
- 5 褐灰色土(10YR6/1)白色軽石を少量含む。粘性強い。
- 6 褐灰色土(10YR6/1)細粒白色軽石、As-Bを僅かに含む。

- 7 暗褐色土(10YR3/3) As-B混土。
- 8 As-B一次堆積層。灰ブロックを少量含む。
- 9 褐灰色土(10YR5/1) As-B混土下水田耕土。
- 10 褐灰色土(10YR4/1)白色軽石、小礫、鉄分凝縮ブロックを少量含む。
- 11 褐灰色土(10YR6/1)径1～5cm程の小礫を多量に混入する。鉄分凝縮ブロック含む。
- 12 褐灰色粘質土(10YR6/1)白色軽石を多量に含む。黄橙色軽石を少量含む。
- 13 褐灰色土(10YR5/1)白色軽石、黄橙色軽石を少量含む。粘性強い。
- 14 灰白色土(10YR7/1)鉄分凝縮ブロックを多量に含む。白色軽石を少量含む。
- 15 褐灰色土(10YR6/1)白色軽石を含む。Hr-FAブロックを少量含む。粘性強く締まりあり。
- 16 褐灰色土(10YR5/1)径1～5cm程の小礫を多量に混入する。大型の礫を数点混入する。
- 17 Hr-FA一次堆積層 白色軽石を含む。
- 18 褐灰色粘質土(10YR5/1)明褐灰色土(7.5YR7/1)洪水層ブロックを多量に含む。
- 19 灰白色粘質土(10YR7/1)白色軽石、鉄分凝縮ブロックを少量含む。
- 20 黒褐色土(10YR3/1) As-C混土。As-Cを多量に含む。
- 21 褐灰色粘質土(10YR4/1) As-Cを僅かに含む。
- 22 褐灰色粘質土(10YR6/1)白色軽石、浅橙色土ブロックを少量含む。
- 23 明青灰色シルト質土(5BG7/1)褐灰色ブロック含む。
- 24 浅黄橙色土(10YR8/3)褐灰色ブロック、鉄分凝縮ブロック含む。
- 25 明青灰色シルト質土(10BG7/1)褐灰色ブロック、鉄分凝縮ブロックを含む。
- 26 褐灰色土(10YR5/1)混入物見らない。粘性強い。
- 27 褐灰色土(10YR6/1)泥炭質土。粘性強い。
- 28 黒褐色土(10YR3/1)泥炭質土。植物片が混入する。
- 29 褐灰色粘質土(10YR4/1)泥炭質土。自然木片、植物片等が混入する。



第5図 基本土層

第3章 発見された遺構と遺物

本遺跡は群馬県庁の北東約5km、前橋市関根町に位置する。遺跡周辺一帯は水田地帯であり、遺跡の南には上武道路が東西に走っている。これら上武道路建設に伴い調査された田口下田尻遺跡や関根赤城遺跡、関根細ヶ沢遺跡等調査からは9世紀から11世紀にかけての集落や製鉄関連遺構など多種多様な遺構が見つかっている。今回の調査は、これら遺跡の北側に立地している。調査対象面積は704.0m²である。

1面 まず、第1面として、中世面における遺構の有無を確認するためのトレーニングを、南西から北東方向に3本入れ、遺構確認を行ったが、遺構等を確認することは出来なかった(第6図)。

2面 第2面として中世面の下層、1108年に起こった浅間山の火山活動に伴って噴出・堆積したAs-Bによって被覆された古代後期の水田面の調査を行った。この面からは水田と北西から南東方向に延びる畦を検出されたものの、工具痕や人や動物の足跡などの痕跡は見つからなかった(第7・9図)。

水田面中央部付近で南北方向に緩やかに蛇行しながら走行する中世の溝1条が検出された。As-Bによって被覆された水田よりも新しい時期の遺構で、本遺跡における今回の発掘調査で検出された最も新しい時期の遺構であるが、確認出来たのはAs-B下の時期である古代後期に相当する第2面における調査時であった(第7・8図)。

3面 As-Bによって被覆された水田の下層を掘削中に、6世紀初頭に榛名山二ツ岳の噴火によって噴出・堆積したHr-FA上面から溝が検出されたため、このHr-FA上面を第3面として調査を行い、溝5条を検出した(第10～14図)。4号溝からは「野」と書かれた墨書き土器や土師器、須恵器などの土器片等8～9世紀代の遺物が出土した(第13図)。これらの溝は、新旧関係は確認出来るものの、埋土の状況からいずれもほぼ近い時期のものであり、出土遺物等の状況から8世紀代の遺構と考えられる。

4面 Hr-FA上面の8世紀と考えられる遺構の調査を終えた後、下層にHr-FAに被覆された古墳時代後期の小区画水田の遺構の存在が予想されたので、第4面として、

それらの遺構の状況を確認するために、Hr-FAの残存状態が比較的良好な調査区北側隅部においてトレーニングを行ったが、Hr-FAによって被覆された古墳時代後期の水田等の遺構は見つからなかった(第15図)。

5面 Hr-FA層の下層からは洪水堆積物が確認出来たため、その下層の粘質土壤が水田耕作土であった可能性が想定出来たので、第5面として、調査区の南西範囲において確認のための調査を行ったが、水田面は検出出来なかつた(第16図)。

6面 さらに、その第5面の下層における状況を確認するため、調査区の南西側、中央から東側にかけて、北西側の3箇所にトレーニングを入れ、5面下のAs-C混土の状況を断面観察した。

調査区の東側と、北西側のトレーニングでは、土層断面の観察からAs-C混土下層に谷地の泥炭質の堆積土層が確認されたため、遺構はない判断した。

一方、調査区の南西側に設定したトレーニングでは、調査区の南西隅部において台地縁辺部を検出することが出来たため、周辺を精査した結果、土坑I基を検出した。この遺構の検出面を第6面として(第17・19図)、土坑の調査を実施した(第18図)。この土坑は、出土遺物が皆無であるため、時期を特定することは出来なかつたが、確定は出来ないものの、土層の状況等から縄文時代から弥生時代にかけてのものと考えられる。

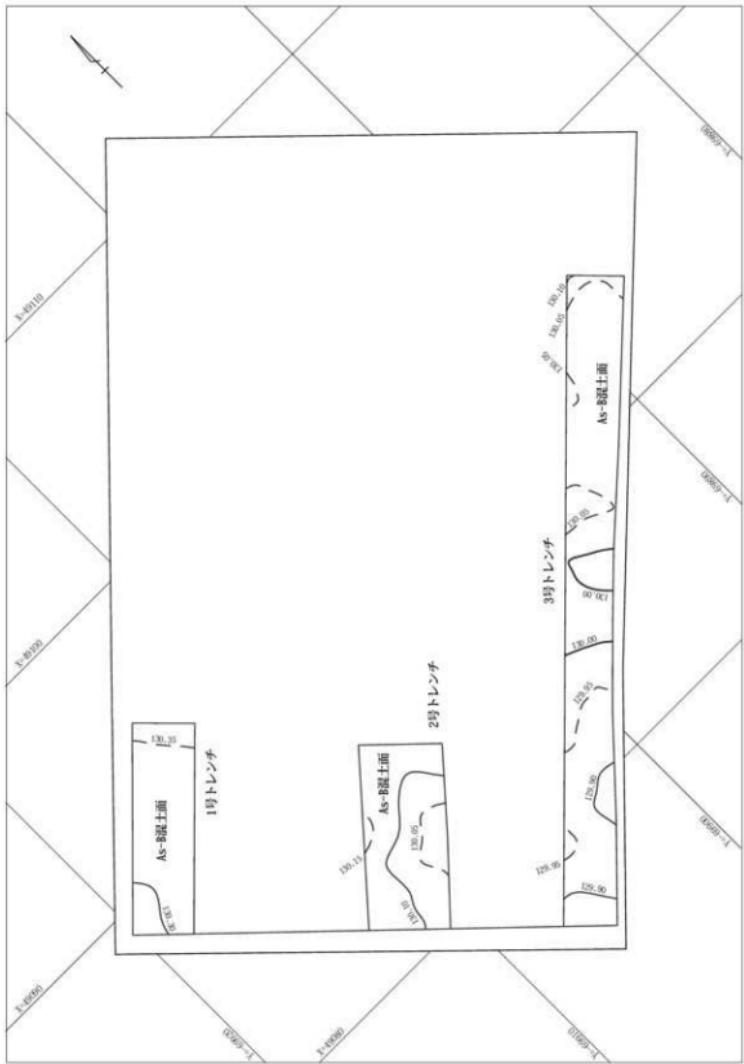
なお、南西部トレーニングの南西端付近では、泥炭質層中から長さ約0.6～約2.5m、幅約0.08～0.11mの自然木片が4点出土した(非掲載)。

また、調査区北西隅部の谷縁辺の泥炭層中から弥生土器小片が数点出土し、第6面においては、調査区のほとんどが谷地であったことが判明した。なお、周辺を広げ、調査を行ったが、遺物包含層を検出することが出来なかつた。

以下では、遺構の年代順に、検出された各遺構について述べる。なお、各遺構から出土した遺物の詳細については、第3表遺物観察表も併せて参照されたい。

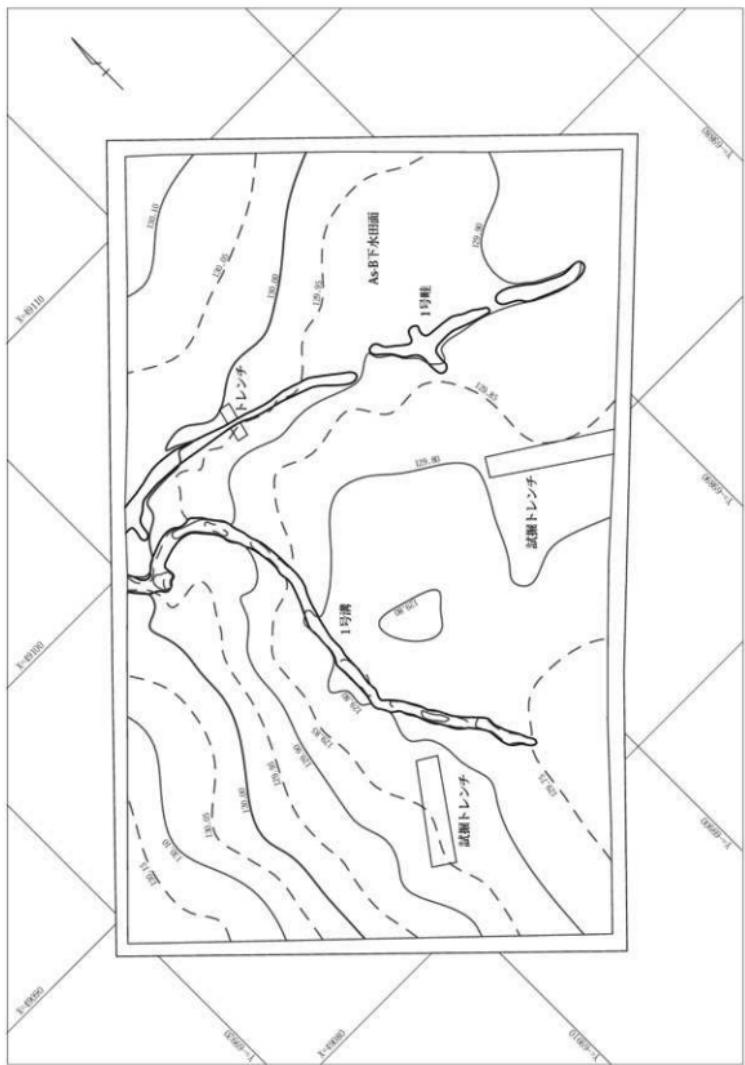


第6図 1面全体図



1:200 10m
0

第7図 2面全体図



第1節 中世の遺構

先述した通り、本遺跡の調査で唯一検出された中世の遺構は、1108年降下の浅間山噴火時の火山噴出物As-Bに被覆された面で検出した、調査区の中央部付近を南北方向に緩やかに蛇行しながら走行する中世の1号溝1条のみである。遺構の検出面自体は古代後期の確認面である。

1. 1号溝(第7・8図、PL. 2)

検出面 2面

位置 調査区の中央部、やや南西寄り。X=49083～908、Y=-69902～910。

重複 なし。

主軸方位 N-43° -W→N-40° -E→N-70° -E→N-64° -W→N-0° -E→N-22° -E→N-6° -E→N-31° -W。

規模 検出全長22.10m、上幅0.30～0.68m、下幅0.14～0.38m、深さ0.02～0.12m。

埋土 鉄分凝集ブロックを含むAs-B混じりの褐色土。

遺物 なし。

所見 先述したように、本来、中世の遺構確認面から掘り込まれた溝の下部が2面において検出来た状態であるので、本来の溝の状態は、幅・深さともに検出状態よりも大きかったものと推測される。

調査区の中央部付近を南北方向に緩やかに蛇行しながら走行する。地形自体は北東から南西へと緩やかに傾斜しており、東端調査区内最高標高は130.15m、調査区南西側の最低標高点で129.74m、調査区内の比高差は0.41mに及んでいる。本溝も地形と同様、北西から南東へと流れ下っている。

本溝の上流は、調査区の北西壁のほぼ中央付近から南東方向に向かい、すぐに約90度屈曲した後、緩やかな弧を描いて南東方向へと向きを変え、緩やかに蛇行しながら南東側へと向かい、X=49083・Y=-69902.9付近で検出来なくなる。上面が削平された結果、これより南東側において検出されなくなっただけで、この地点において溝が止まっている訳ではない。

溝底は、部分的に掘り窪められ、細長い土坑状を呈する部分が数箇所認められ、平坦ではない。なお、調査区

北西壁際の溝底最高地点の標高は129.92m、溝南端部分における溝底の標高は129.73mである。

埋土に鉄分凝集ブロックが含まれているため、水流があつたものと想定出来るが、蛇行が甚だしく、人为的な水路等とは考えにくい。

時期 中世のものと考えられる。

第2節 古代後期の遺構

先述した通り、1108年降下の浅間山噴火時の火山噴出物As-Bに被覆された古代後期の水田面の調査を行った。この面からは水田と西北西から東南東方向に延びる畦が検出された。

1. As-B下水田(第7・9図、PL. 3)

検出面 2面

耕土 鉄分凝集ブロックを含む褐色粘質土。

概要 調査区の全域において水田面が検出されたが、1枚の水田区画がまるまる検出来たものは無い。畦畔は調査区の中央よりやや北寄りの位置において北西-南東方向に延びるもののが1本検出されたのみであり、水路や棚田造成のための段差なども検出されず、水田の残存状態は良好とは言えない状態であった。

北側から南側に向かって傾斜する地形であり、検出された水田面の標高は129.75m～130.15mで、標高が最も高い調査区東隅と最も低い南隅との比高差はおよそ0.40mである。

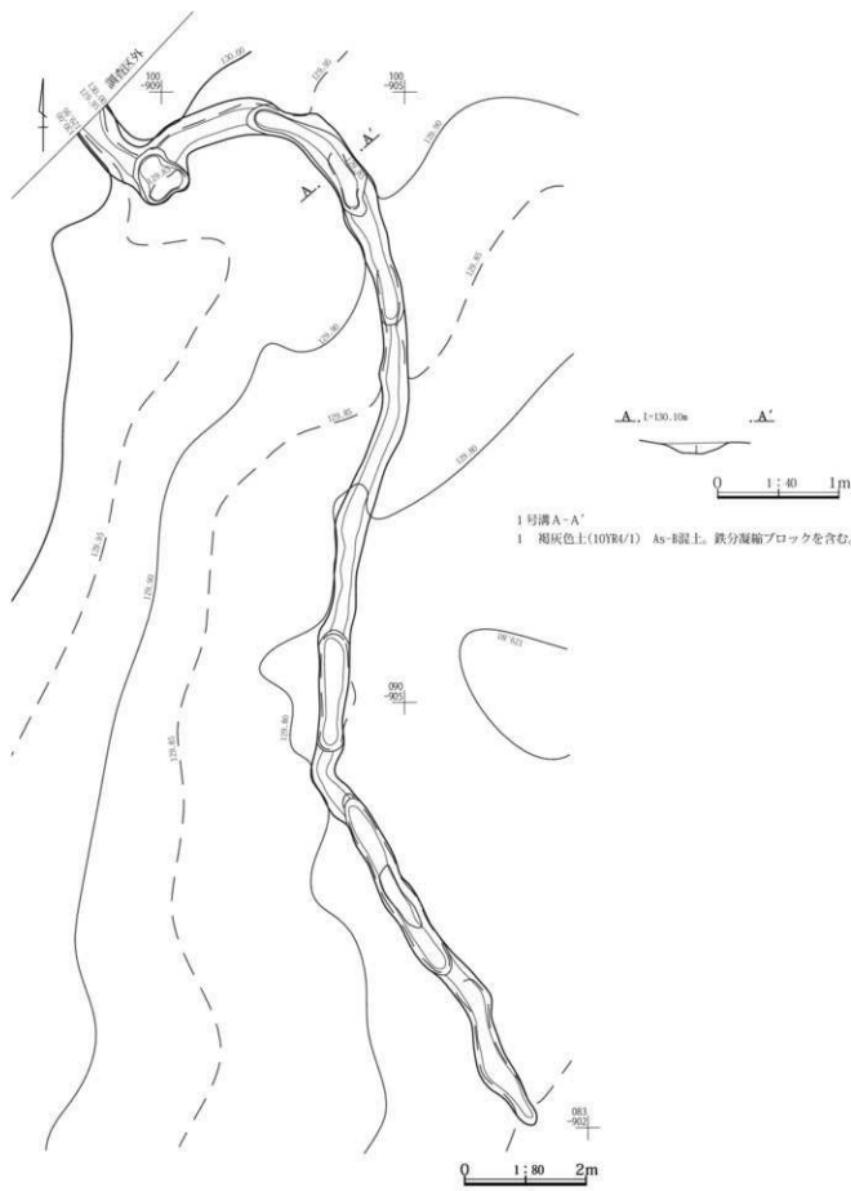
先述したように、水田1区画のすべてが検出されたものはないので、限られた範囲内ののみの検出結果に過ぎないが、検出された水田面の高低差や傾斜はそれぞれ異なっている部分もある。利根川とその支流である中小河川によって形成された小規模な谷地形が複雑に入り込む地形の制約を受けながらも、狭小な範囲を活かしつつ、少しでも効率的な生産性が見込まれるよう、水田を形成していく様子を窺うことが出来る。

2. 1号畦(第7・9図、PL. 3)

畦の位置 調査区の中央部よりやや北寄り。X=49095～102、Y=-69902～910。

重複 なし。

主軸方位 N-70° -W。



第8図 1号溝

規模 検出全長21.10m、上幅0.18~0.69m、下幅0.29~1.00m、畦の高さ0.02~0.07m。

水口 調査区南東壁から北西に約5mの位置、X=49096.8・Y=-69891.4付近から幅約0.24mの水口が検出され、さらに、調査区南東壁から北西に約10.5mの位置、X=49099・Y=-698896.8付近からも幅約0.7mの水口が検出されている。いずれも北側から南側への取水である。

遺物 なし。

所見 検出状況は悪いが、西北西-東南東方向に走行する畦畔が約21.10mに亘って検出された。

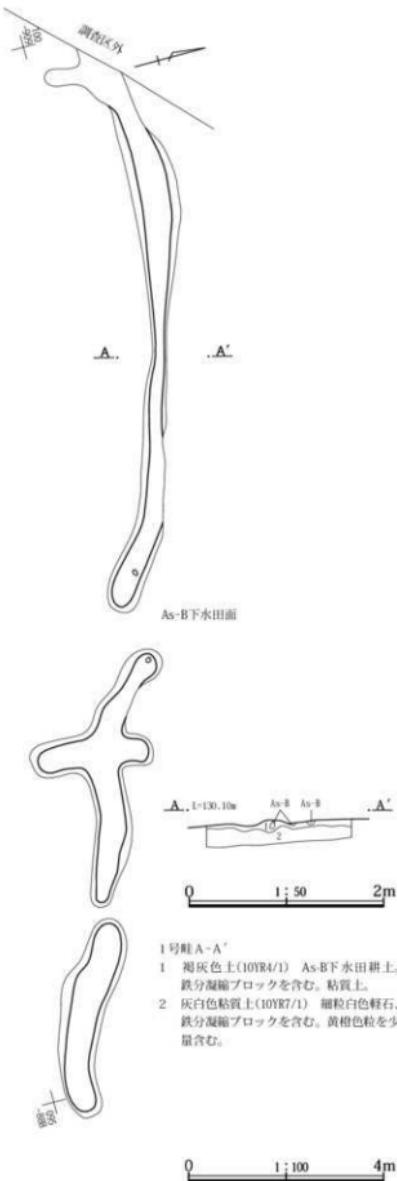
東側に寄るに従い、主軸が南寄りに傾いていく様子が看取できた。また、東側では、検出状況はさらに悪くなり、畦畔の高まりが全く確認出来ない箇所も存在している。さらに、南東壁際ではもはや全く検出不可能になる。

北西壁から約0.6m程度の地点では南側に伸びる畦畔が約0.8m分、また、北西壁から約12m程度の地点では南北方向に伸びる畦畔がそれぞれ約0.5~0.9m分検出されたが、検出可能な個所はいずれも短く、詳細を明らかにすることは出来なかった。

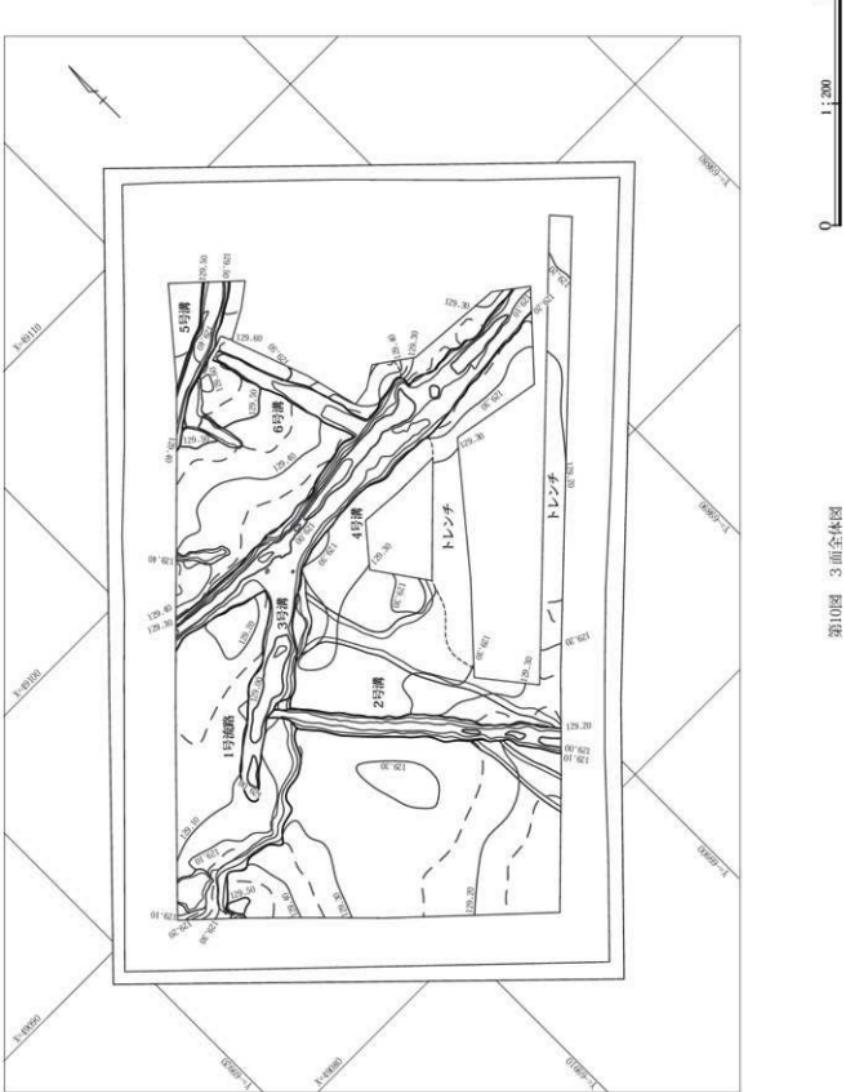
土層断面の観察から、この畦畔は、細粒白色軽石、鉄分凝集ブロックを含み、黄橙色粒を少量含む灰白色粘質土の地山を削り出して高まりを造り出したことが判明した。

第3節 古代の遺構

先述した通り、As-Bによって被覆された水田の下層を掘削中に、6世紀初頭に榛名山二ツ岳の噴火によって噴出・堆積したHr-FA上面から溝が検出されたため、このHr-FA上面を第3面として調査を行い、溝2~6号溝の5条を検出した。調査区の南寄りから検出された北西-南東方向の2号溝。調査区の南西寄りから検出された南西-北東方向の3号溝。調査区のほぼ中央を東西方向に横断する4号溝、調査区の北寄りを西南西-東北東方向に走行する5号溝、調査区の北隅付近北西-南東方向の6号溝である。これらの他に調査区の南西側から、これらの溝に先行する自然流路である1号流路が検出されているが、これらの溝が機能していた時期には完全に埋没



第9図 As-B下水田1号畦



第10図 3面全体図

していたものと考えられる。なお、この1号溝は自然のものであるので、遺構認定はしていない。

これらの溝は、重複等による相互の新旧関係は確認出来るものの、埋土の状況からいずれもほぼ近い時期のものと考えられる。遺物が出土したのは4号溝のみであったが、4号溝の出土遺物の状況から、いずれも8~9世紀代の遺構と考えられる。

1. 2号溝(第10・11図、PL. 4)

検出面 3面

位置 調査区のやや南寄り。X=49082~092、Y=-69900~909。

重複 北西端を3号溝に掘り込まれる。

主軸方位 N-41°-W。

規模 検出全長12.06m、上幅0.33~1.00m、下幅0.07~0.29m、深さ0.06~0.23m。

断面 比較的広めの不整逆台形状を呈している。

埋土 浅黄橙色砂質土ブロック及び鉄分凝集ブロックを少量含む粘性強い薄い黄褐色土がまず堆積し、その西側から覆い被さる様に褐灰色土ブロック、植物片を混入する砂質土主体の浅い黄橙色土が堆積している。

遺物 非掲載であるが、埋没土中より古代の土師器杯小片が1点出土。

所見 調査区の南寄りを北西から南東方向にほぼ直線的に流れる。3号溝に掘り込まれた地点における溝底の標高は129.03mで、溝底の標高は129.01~05mとほぼ平坦に近いが、南東寄りで129.95~98mと若干下がっている。それでも比高差は約0.1m程度である。

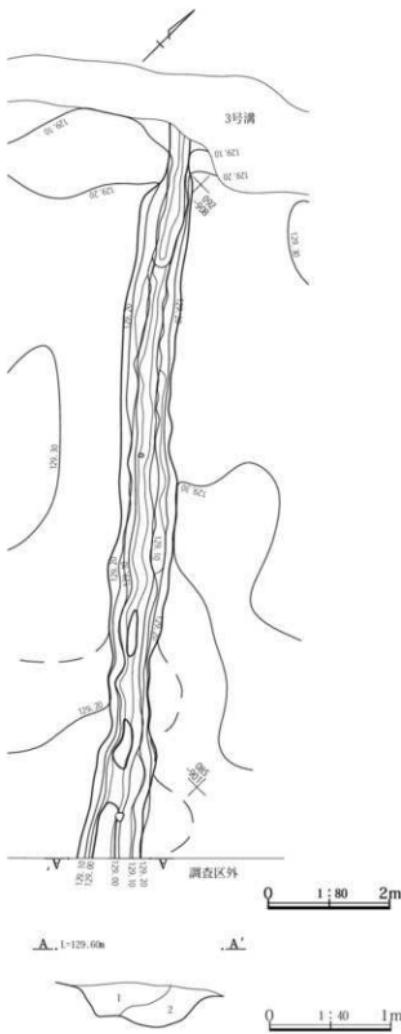
北西端は3号溝に破壊されており、3号溝よりも北西側からは検出されなかった。3号溝よりは古い段階の溝と考えられる。南東側は調査区の南東壁外へと延びている。

埋土中に鉄分凝集ブロックが含まれているため、水流があったものと想定出来るが、溝底の高低差が然程には大きくないため、水流の勢いはそう激しいものではあったとは考えにくいようと思われる。

時期 8~9世紀代のものと考えられる。

2. 3号溝(第10・12図、PL. 5)

検出面 3面



2号溝A-A'

1 浅黄橙色土(10YR8/3) 褐灰色土ブロック、植物片が混入する。砂質土主体。

2 薄い黄褐色土(10YB4/3) 浅黄橙色砂質土ブロック、鉄分凝集ブロックを少量含む。粘性強い。

第11図 2号溝

第3章 発見された遺構と遺物

位置 調査区の南西寄り。X=49090~092、Y=-69900~909。

重複 2号溝の北西端を掘り込む。北東端は4号溝から分流する。

主軸方位 N-54° -E。

規模 検出全長9.56m、上幅0.67~1.83m、下幅0.26~1.10m、深さ0.13~0.24m。

断面 逆台形状を呈している。

埋土 上層に砂質土ブロックを含み、細粒白色軽石を少量含む褐色土が、下層に砂質土と灰白色粘質土が互層に堆積している。

遺物 非掲載であるが、埋土中より古代の土師器杯小片2点が出土している。

所見 4号溝の調査区北西壁から約4.5m付近、X=49096・Y=-69904.5地点付近から分岐して、調査区の南西寄りを北東から南西方向にほぼ直線的に走向し、X=49090.2・Y=-69911.8付近で止まっている。それよりも南西側では、上面の削平により検出することが出来ないだけのことであるのか、あるいはもともとの地点において止まっていたのかは、明らかにすることは出来なかつた。

蛇行はほぼしていないが、溝幅は、南西側で次第に狭く、窄まっている。

4号溝からの分岐地点における溝底の標高は129.01~129.04mで、溝底に高さ0.05~0.11m、長さ約0.7~1.23m、幅0.34mの平面梢円形状を呈する突起状の地山の掘り残し箇所が3箇所並列しており、4号溝からの分岐地点に堰のようなものが設けられていた可能性も考えられる。

溝底には3箇所程、土坑状に一段と深く掘り窪められた部分が存在しているが、それ以外の箇所における溝底の標高は概ね128.94~129.04mと勾配は緩い。

埋土中に鉄分凝集ブロックが含まれているため、水流があったものと想定出来るが、2号溝同様、溝底の高低差が然程には大きくないため、水流の勢いはそう激しいものであったとは考えにくく思われる。

時期 8~9世紀代のものと考えられる。

3. 4号溝(第10・12・13図、PL. 5・9)

検出面 3面

位置 調査区のほぼ中央、やや北寄りの位置。X=49095~098、Y=-69899~909。

重複 6号溝の南東端を掘り込む。調査区北西壁から約4.5m付近、X=49096・Y=-69904.5地点付近から3号溝が分岐する。

主軸方位 N-83~90° -W。

規模 検出全長20.30m、上幅0.76~2.58m、下幅0.10~0.58m、深さ0.24~0.47m。

断面 逆台形状を呈している。

埋土 上層に砂質土ブロックを含み、細粒白色軽石を少量含む褐色土、中層に砂質土ブロックを多量に含み、自然木片を混入する褐色土、下層に砂質土ブロックを少量含む暗褐色土がそれぞれ堆積している。

遺物 埋土中より古代の土器が7点出土した。

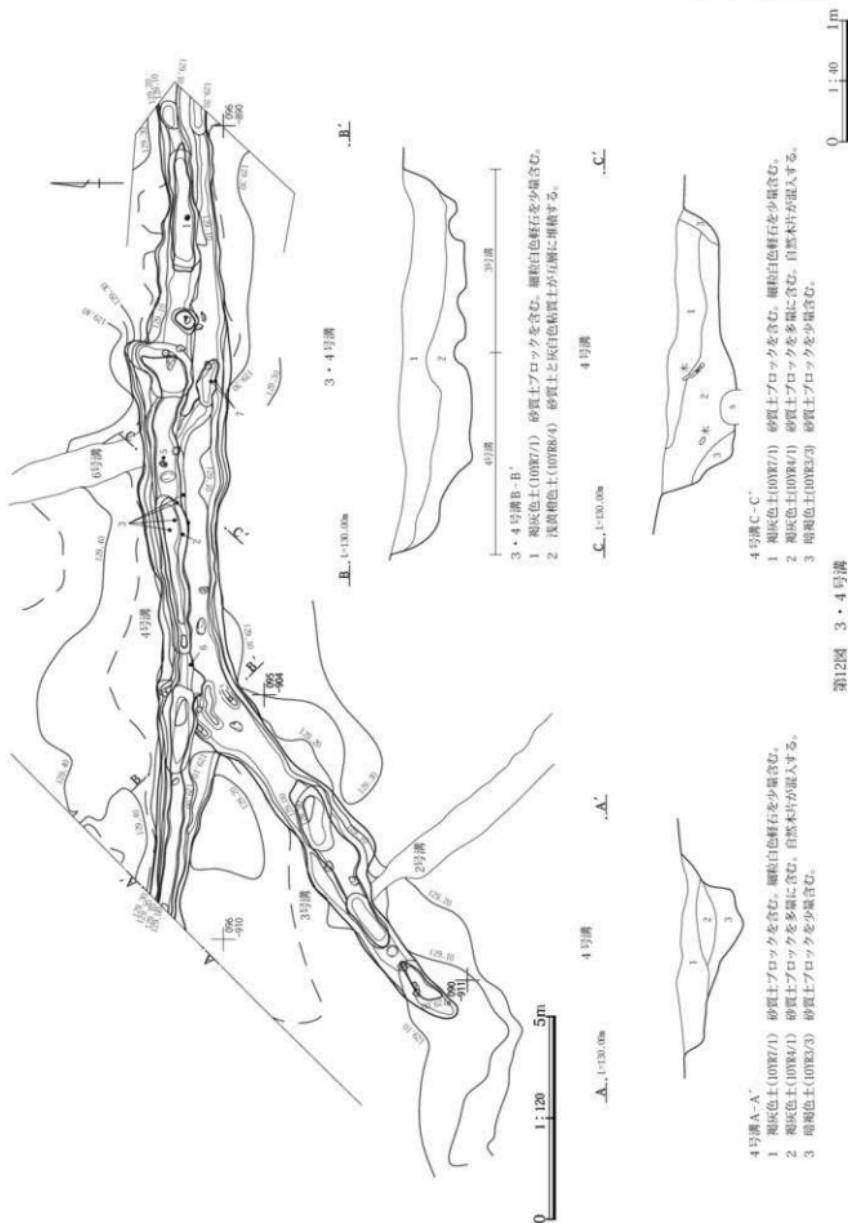
1は、9世紀前半のほぼ完形の土師器杯。溝の東寄り、溝東寄り、X=49096.835・Y=-69892.242地点の標高129.181m、溝底より0.261m上から出土。口径12.0cm、底径9.0cm、高さ3.4cm。鈍い橙色を呈している。底部内面に墨書き「野」。

2は、古代の土師器碗2/3片。溝中央、X=49097.002・Y=-69900.056地点の標高129.081m、溝底より0.171m上から出土。口径11.0cm、胴部最大径13.3cm、底径8.1cm、高さ6.0cm。鈍い橙色を呈している。口縁部は内傾する。類例を見ない形態である。口縁部が内傾する形態から7世紀後半代の杯に形態が近いとみられるが、やや形態が異なる。明確な年代観は今後の課題としたい。

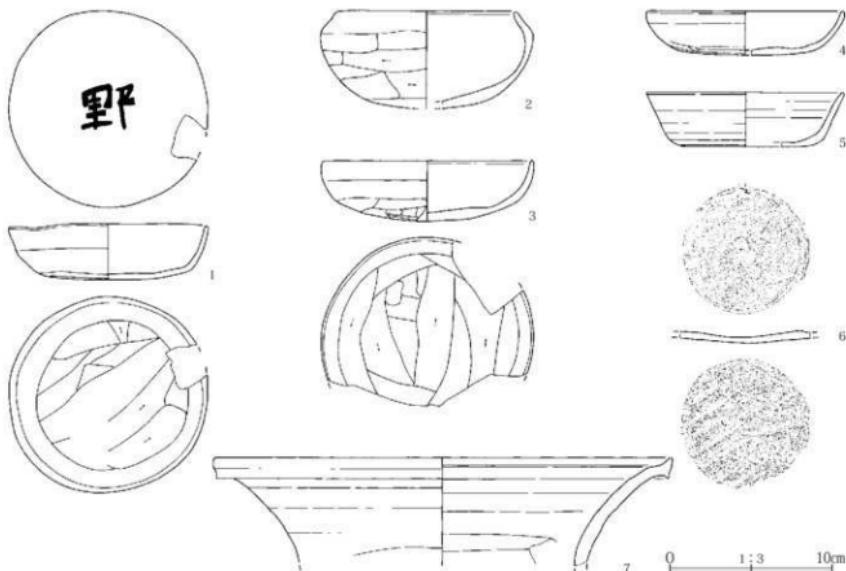
3は、8世紀第4四半期~9世紀第1四半期の土師器杯1/2片。溝中央、2の北側、X=49096.987~097.324・Y=-69899.076~899.939地点の標高128.916~129.011m、溝底より0.076~0.171m上からの出土。口径12.7cm、底径10.9cm、高さ3.7cm。鈍い橙色を呈している。体部に丸みを残すなど1よりも丁寧な作りをしている。

4も同じく8世紀第4四半期~9世紀第1四半期の土師器杯口縁部~底部片。埋土中からの出土。口径12.0cm、底径9.2cm、高さ2.6cm。鈍い黄橙色を呈している。体部に丸みを残すなど1よりも丁寧な作りをしている。

5は、8世紀前半の須恵器杯口縁部~底部片。溝の中央よりやや東寄り、X=49097.474・Y=-69898.173地点の標高128.850m、ほぼ溝底からの出土。口径12.0cm、



第12図 3・4号溝



第13図 4号溝出土遺物

底径9.4cm、高さ3.3cm。灰白色を呈している。

6は古代の土師器杯かと思われる底部片。溝の西寄り、
 $X = 49096.806 \cdot Y = -69903.256$ 地点の標高129.135m、
 溝底より0.225m上からの出土。鈍い橙色を呈している。
 底部だけのため不明な点が多い。体部は丁寧に打ち欠かれており、再利用されたとみられる。

7は古代の須恵器甕の口縁部片。溝の南東寄り、
 $X = 49696.307 \sim 696.307 \cdot Y = -69896.282 \sim 896.299$ 地点の
 標高129.052~0.092m、溝底より0.012~0.052m上からの
 出土。口径は29.8cm。黄灰色を呈している。口縁部だけの
 残存のため詳細は不明である。なお、非掲載であるが、
 埋没土より古代の土師器杯小片24点と土師器甕小片23点
 が出土している。

所見 調査区のほぼ中央、やや北寄りの位置をほぼ北西-南東方向に走向する、本遺跡で検出された最大規模の溝である。北西端は調査区北西壁外に延び、南東端は調査区南東壁の北約4.5m付近、
 $X = 49097.2 \cdot Y = -69888.8$ 地点まで検出されている。

先述したように、調査区北西壁から約4.5m付近、

$X = 49096 \cdot Y = -69904.5$ 地点付近から南西方向へと3号溝が分岐している。

溝底の標高は南東端で129.09m、北西端で128.89m、
 南東側が高く北西側が低い。比高差は約0.2mである。
 また、溝底には調査範囲内において計約10箇所土坑状に
 一段低く掘り窪められた箇所が点在している。

溝幅は中央部分で最も広く、上幅約2.58mで、北西端の最下流側では狭まっており約0.76mである。

北西端は3号溝に破壊されており、3号溝よりも北西側からは検出されなかった。3号溝よりは古い段階の溝と考えられる。南東側は調査区の南東壁外へと延びている。

埋土中に鉄分凝集ブロックが含まれているため、水流があったものと想定出来、南東側から北西へと流れていったものと考えられる。

時期 8~9世紀代のものと考えられる。

4. 5号溝(第10・14図、PL. 6)

検出面 3面

位置 調査区の北隅部。 $X = 49102 \sim 105, Y = -69897 \sim$

903。

重複 6号溝の北西端を掘り込む。

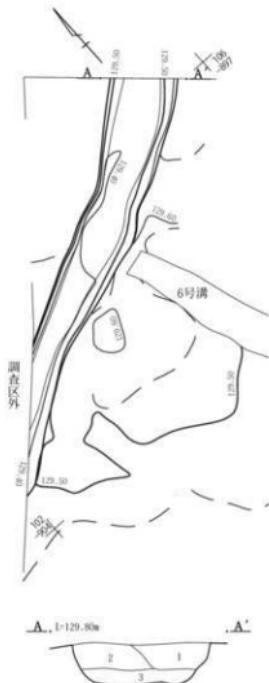
主軸方位 N-52°~65°-E。

規模 檜出全長5.95m、上幅0.56~1.10m、下幅0.29~0.71m、深さ0.15~0.47m。

断面 やや幅広い逆台形状を呈している。

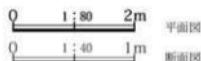
埋土 上層に細粒白色軽石及び砂質土ブロックを含む灰黄褐色土、中層に細粒白色軽石及び鉄分凝縮ブロックを含む暗褐色土、下層に黒褐色土ブロック及び鉄分凝縮ブロックを含む。

5号溝



5号溝A-A'

- 1 黄褐褐色土(10YR7/2) 細粒白色軽石、砂質土ブロックを含む。
- 2 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石、鉄分凝縮ブロックを含む。
- 3 黒褐色土(10YR5/1) 黒褐色土ブロック、鉄分凝縮ブロックを少量含む。



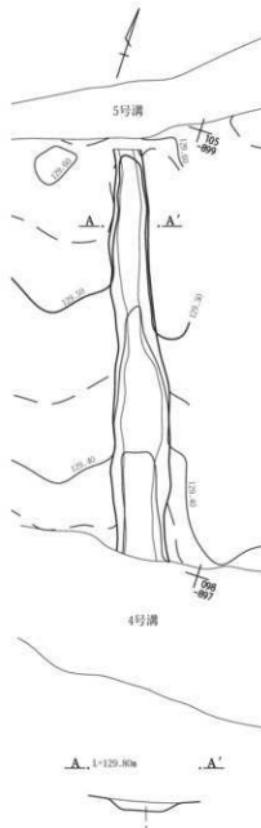
ロックを少量含む褐灰色土がそれぞれ堆積している。

遺物 なし。

所見 調査区の北隅部で、僅か約6m分しか検出されなかったが、検出範囲においては若干蛇行しながら北東-南西方向に向かっている様子が窺える。北東・南西端双方とも調査区外へと延びている。

溝底の標高は北東端で129.41m、南西端で129.36m。北東側が高く南西側が低いものの、比高差は約0.2mとほぼ平坦である。溝底の造作も平坦で、調査範囲内に

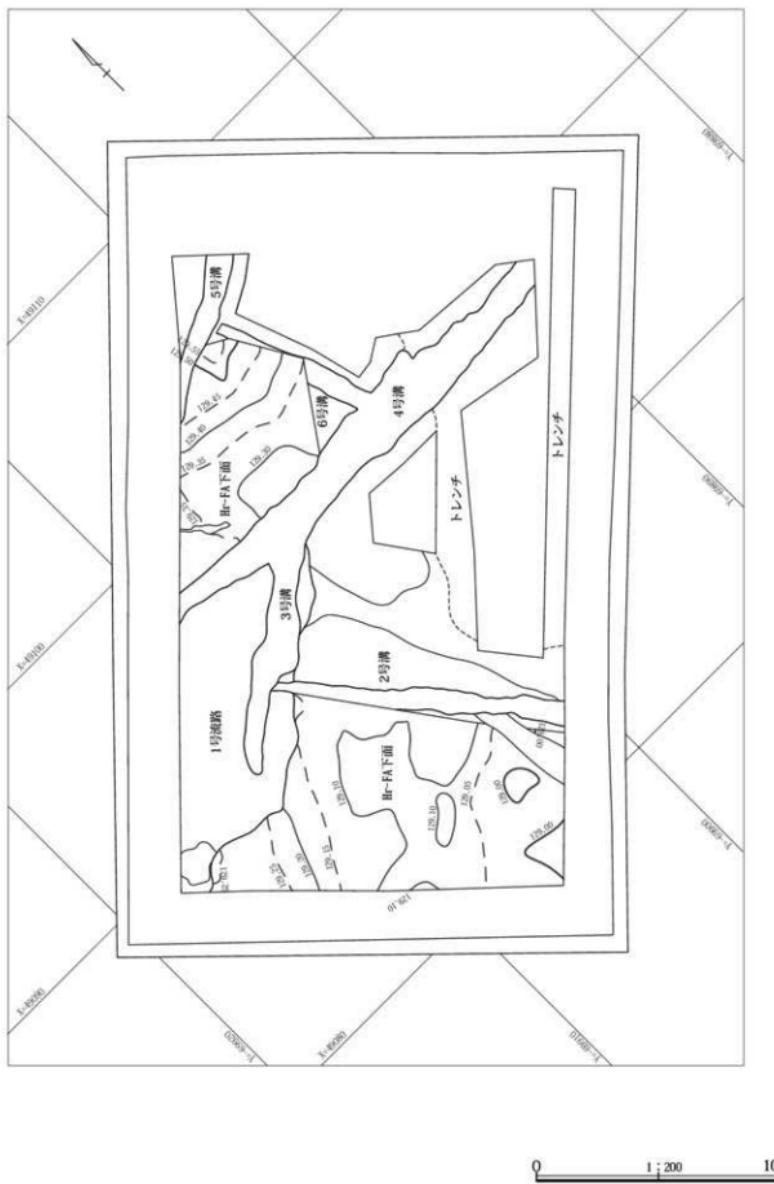
6号溝



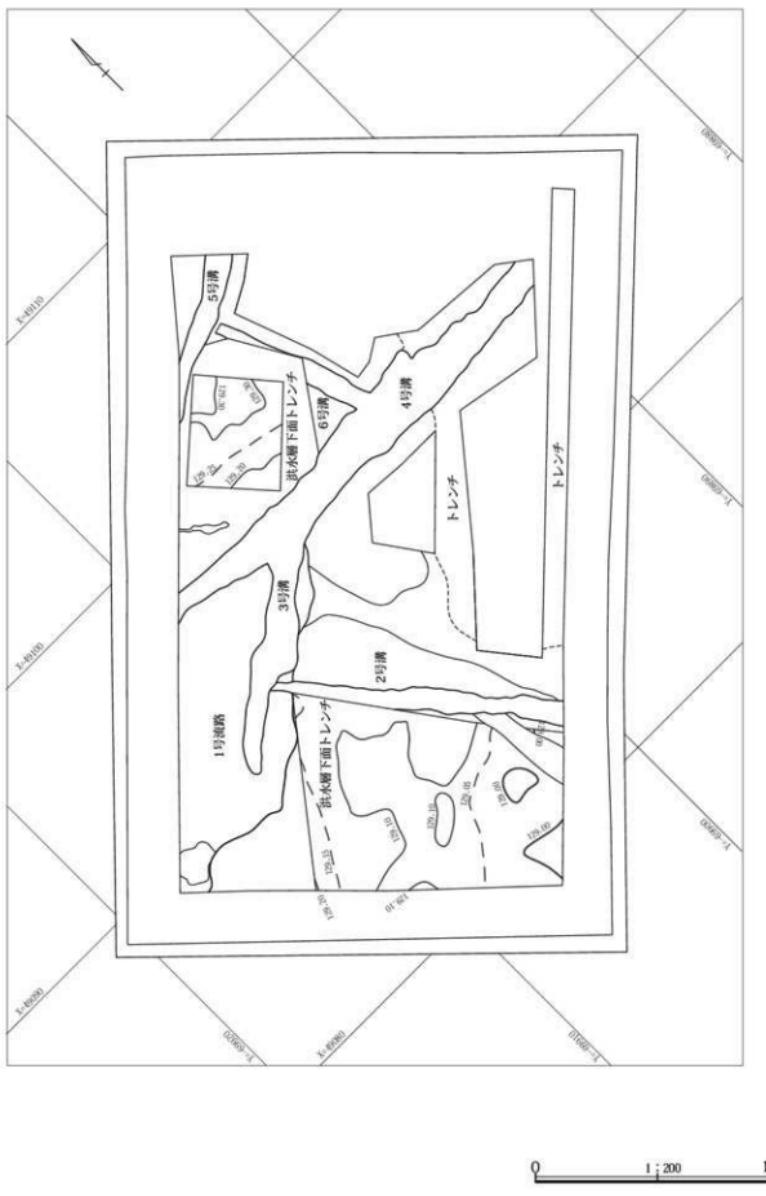
6号溝A-A'

- 1 暗褐色粘質土(10YR3/3) Hr-FAブロック、鉄分凝縮ブロックを含む。

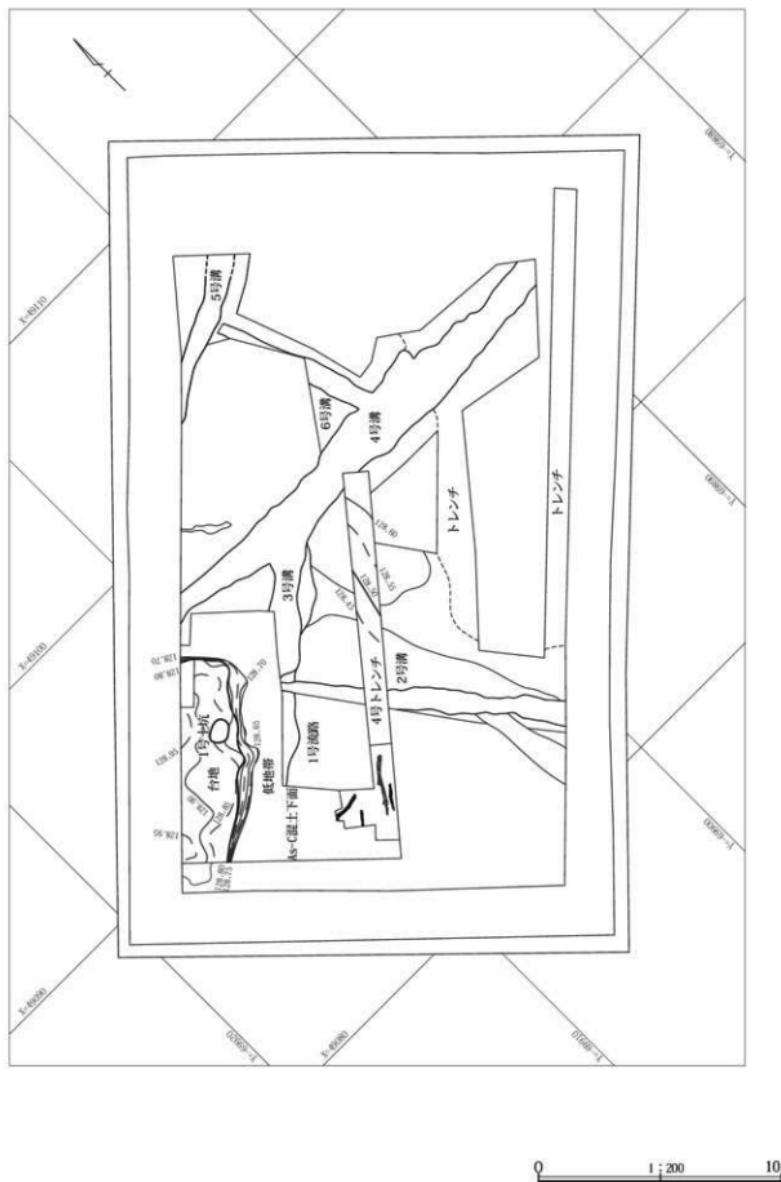
第14図 5・6号溝



第15図 4面全体図



第16図 5面全体図



第17図 6面全体図

においては土坑状に一段低く掘り窪められた箇所は全く検出されなかった。溝幅は中央部分で最も広く、南北の下流側では狭まっている。

埋土中に2~4号溝と同様、鉄分凝集ブロックが含まれているため、溝底は概ね平坦ではあるものの、北東側から南西側に向かって緩やかな水流があったものと想定出来る。

時期 8~9世紀代のものと考えられる。

5. 6号溝(第10・14図、PL. 6)

検出面 3面

位置 調査区の中央から北寄りの位置。X=49098~104、Y=-69897~900。

重複 北西端を5号溝に、南東端を4号溝にそれぞれ掘り込まれる。

主軸方位 N-19°-W。

規模 検出全長6.70m、上幅0.43~0.97m、下幅0.21~0.68m、深さ0.21~0.68m。

断面 薄く扁平なレンズ状を呈している。

埋土 Hr-FAブロック及び凝縮ブロックを含む暗褐色粘質土が堆積している。

遺物 なし。

所見 調査区の中央からやや北寄りの位置で、僅か約7m弱しか検出されなかつたが、検出範囲においてはほぼ直線的に北西~南東方向に走向している様子が窺える。北西・南東端双方ともそれぞれ他溝に掘り込まれ、破壊されている。

溝底の標高は北西で129.49m、南東で129.26m、北西側が高く南東側が低い。比高差は約0.23mである。

溝底の造作は平坦で、調査範囲内においては土坑状に一段低く掘り窪められた箇所は全く検出されなかつた。溝幅は中央部分で最も広く、北西の上流側では狭まっている。

埋土中に2~5号溝と同様、鉄分凝集ブロックが含まれているため、北西側から南東側に向かってやや緩やかな水流があったものと想定出来る。

時期 8~9世紀代のものと考えられる。

第4節 繩文・弥生時代の遺構

先述した通り、Hr-FA上面の8世紀と考えられる遺構の調査を終えた後、下層にHr-FAに被覆された古墳時代後期の遺構の存在が予想されたので、第4面として、Hr-FAの残存状態が比較的良好な調査区北側隅部においてトレチ調査を行ったが、遺構の発見には至らなかつた。

Hr-FA層の下層からは洪水堆積物が確認出来たため、第5面として、調査区の南西範囲において確認調査を行つたが、第4面と同様、遺構の検出には至らなかつた。

さらに、その第5面の下層における状況を確認するためにトレチを入れたところ、調査区の南西隅部にて台地の北東縁辺部を検出することが出来たため、周辺を精査した結果、土坑1基を検出した。この遺構検出面を第6面とし、この土坑の調査を実施した。

1. 1号土坑(第17・18図、PL. 7)

検出面 6面

位置 調査区の南西寄り。X=49092~093、Y=-69911~912。

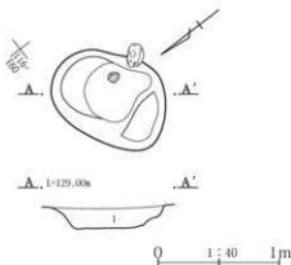
重複 なし。

主軸方位 N-62°-E。

規模 長径0.93m、短径0.73m、深さ0.16m。

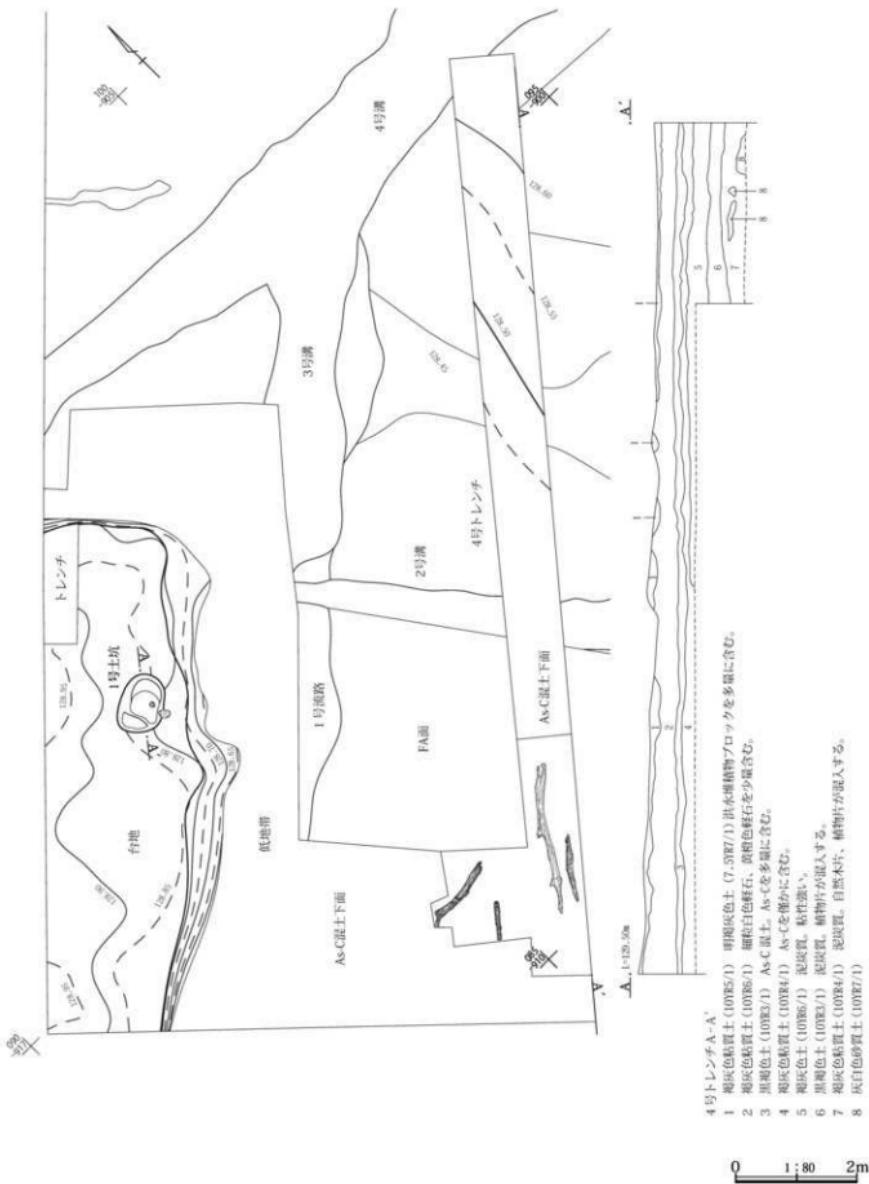
平面 北東~南西方向に長い不整規円形状を呈している。

断面 広く扁平な逆台形状を呈している。底面は平坦である。



1号土坑A-A'
1 底面は暗褐色土(10YR4/2)、鉄分凝縮ブロックを含む。

第18図 1号土坑



第19図 6面4号トレンチ周辺図

埋土 褐灰色土ブロック及び鉄分凝縮ブロックを含む灰褐色土が堆積している。

遺物 底面直上から自然礫が1点出土している(非掲載)。

所見 小規模で浅い土坑で、用途や機能は不明である。

土坑周辺部の標高は128.80~90m、坑底の標高は128.66m前後である。

時期 出土遺物が皆無であるため、時期を特定することは出来なかったが、土層の状況等から縄文時代から弥生時代にかけてのものと考えられる。

第5節 遺構外出土遺物(第20図、PL. 9)

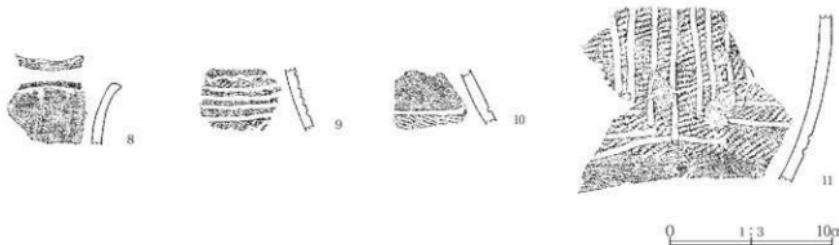
1. 遺構外出土遺物(第20図、PL. 9)

遺構外出土遺物として採り上げたものは、いずれも谷部の表土から出土した弥生時代中期中葉の壺片4点である。

2. 遺構外出土非掲載遺物

なお、非掲載であるが、1面から、江戸時代国産磁器：2点(9g、肥前磁器染付皿口縁部片)、江戸時代国産陶器：3点(117g、肥前陶器：呉器手碗底部1点、京焼風陶器碗底部片(高台内に印銘の一部が残る)1点、三島手皿口縁部片1点)が出土した。

また、3面からは古代の土師器杯片2点(9g)、古代の土師器甕小片10点(63g)が出土している。



第20図 遺構外出土遺物

第3章 発見された遺構と遺物

第2表 検出遺構一覧表

番	遺構名	位置	垂複	主軸方位	方向	計測値	理土	遺物	時期
1号溝	調査区の中央部、やや南寄り。X=49083~908、Y=69902~610	なし。		N-31°~64°-W、N-40°~70°-E。	北西→南東。	検出全長22.10m、上幅0.30~0.68m、下幅0.14~0.38m、深さ0.02~0.12m。	鉄分凝集ブロックを含むAs-B膜じりの褐色土。	なし。	中世。
2面	As-B下水田	調査区全域	なし。					なし。	古代後~末期。
1号溝	調査区の中央部よりやや北寄り。X=49095~102、Y=69902~810。	なし。		N-70°-W。	西北西→東南東。	検出全長21.10m、上幅0.18~0.69m、下幅0.29~1.00m、畔の高さ0.02~0.07m。		なし。	古代後~末期。
2号溝	調査区のやや南寄り。X=49082~092、Y=-69900~909。	北西端を3号溝に振り込まれる。		N-41°-W。	北西→南東。	検出全長12.06m、上幅0.33~1.00m、下幅0.07~0.29m、深さ0.06~0.23m。	浅黄色砂質上部及び鉄分凝集ブロックを少量含む粘性強い深い黃褐色土がまず堆積し、その西側から層へ渡る様に褐色土ブロック、砂利等を混入する砂質土主体の深い黃褐色土が堆積している。	なし。	8世紀。
3面	3号溝	調査区の南寄り。X=49090~092、Y=-69900~909。	2号溝の北西端を振り込む。北東端は4号溝から分岐する。	N-54°-E。	北東→南西。	検出全長9.56m、上幅0.67~1.83m、下幅0.26~1.10m、深さ0.13~0.24m。	上層に砂質土ブロックを含み、細粒白色軽石を少量含む褐色土が。下層に砂質土と白色粘土土が互層に堆積している。	なし。	8世紀。
4号溝	調査区のはば中央、やや北寄りの位置。X=49095~098、Y=-69899~909。	6号溝の南東端を振り込む。調査区北西壁から約4.5m付近から3号溝が分岐する。		N-83°~90°-W。	東→西。	検出全長20.30m、上幅0.76~2.58m、下幅0.10~0.58m、深さ0.24~0.47m。	上層に砂質土ブロックを含み、細粒白色軽石を少量含む褐色土。中層に細粒白色軽石及び鉄分凝縮ブロックを含む褐色土。下層に黒褐色土ブロック及び鉄分凝縮ブロックを少量含む褐色土がそれぞれ堆積している。	古墳の土器、土器片計7点	8世紀。
5号溝	調査区の北端部。X=49102~105、Y=-69897~903。	6号溝の北西端を振り込む。		N-52°~65°-E。	北東→南西。	検出全長5.95m、上幅0.50~1.10m、下幅0.29~0.71m、深さ0.15~0.47m。	上層に細粒白色軽石及び砂質土ブロックを含む灰褐色土。中層に細粒白色軽石及び鉄分凝縮ブロックを含む褐色土。下層に黒褐色土ブロック及び鉄分凝縮ブロックを少量含む褐色土がそれぞれ堆積している。	なし。	8世紀。
6面	6号溝	調査区の中央から北寄りの位置。X=49058~104、Y=-69897~900。	北西端を5号溝に、南東端を4号溝にそれぞれ振り込まれる。	N-19°-W。	北西→南東。	検出全長6.70m、上幅0.43~0.97m、下幅0.21~0.68m、深さ0.21~0.68m。	Hr-Mブロック及び凝縮ブロックを含む暗褐色土が堆積している。	なし。	8世紀。
6面	1号土坑	調査区の南寄り。X=49092~093、Y=-69911~912。	なし。	N-62°-E。	北東→南西方向に長い不整規円形。	長径0.93m、短径0.73m、深さ0.16m。	褐色土ブロック及び鉄分凝縮ブロックを含む灰褐色土が堆積している。	自然礫I(非鉢載)	縄文~弥生時代。

第4章 調査成果の整理とまとめ

1. 中世の遺構

先述した通り、本遺跡の調査で唯一検出された中世の遺構は、1108年降下の浅間山噴火時の火山噴出物As-Bに被覆された面における調査時に確認された、調査区の中央部付近を南北方向に緩やかに蛇行しながら走行する中世の1号溝1条のみである。

溝の下部が2面において検出された状態であるので、本来の溝の状態は、幅・深さとともに検出状態よりも大きかったものと推測される。

水流があったものと想定出来るが、蛇行が甚だしく、人為的な水路等とは考えにくい。

2. 古代後期の遺構

調査区の全域において1108年降下の浅間山噴火時の火山噴出物As-Bに被覆された古代後期の水田面が検出されたが、1枚の水田区画がまるまる検出されたわけではない。

畦畔は調査区の中央よりやや北寄りの位置において北西-南東方向に延びるもののが1本、約21.10mに亘って検出されたのみである。畦畔の高まりが全く確認出来ないような箇所も存在しており、南東壁際では全く検出不可能となるなど、検出状況は良好ではない。

水路や棚田造成のための段差なども検出されず、水田の残存状態は良好とは言えない状態であった。

利根川とその支流である中小河川によって形成された小規模な谷地形が複雑に入り込む地形の制約を受けながらも、狭小な範囲を活かしつつ、少しでも効率的な生産性が見込まれるよう、水田を形成していった様子を窺うことが出来る。

3. 古代の遺構

6世紀初頭に榛名山二ツ岳の噴火によって噴出・堆積したHr-FA上面から溝5条を検出した。

2号溝は、調査区の南寄りを北西から南東方向にほぼ直線的に流れ、水流が想定出来るが、溝底の高低差が然

程には大きくないため、水流の勢いはそう激しいものではなかったとは考えにくい。

3号溝は、4号溝から分岐し、調査区の南西寄りを北東から南西方向にほぼ直線的に走向する。蛇行は顯著ではないが、溝幅は、南西側で次第に狭く窄まっている。

なお、4号溝からの分岐地点に堰のようなものが設けられていた可能性も考えられる。水流が想定出来るが、2号溝同様、溝底の高低差が然程には大きくないため、水流の勢いはそう激しいものではなかったとは考えにくい。

4号溝は、調査区のほぼ中央、やや北寄りの位置をほぼ南東側から北西へと流れていたものと考えられる本遺跡で検出された最大規模の溝である。埋土中からは8世紀前半から9世紀前半にかけての土師器5点、須恵器2点が出土した。それらの中でも底部に「野」と記された9世紀前半の墨書き器が出土したことが特筆される。溝幅は中央部分で最も広く、北西端の最下流側では狭まっている。

5号溝は、調査区の北隅部で、僅か約6m分しか検出されなかつたが、検出範囲においては若干蛇行しながら北東側から南西側に向かって緩やかな水流があつたものと想定出来る。溝幅は中央部分で最も広く、南西の下流側では狭まっている。

6号溝は、調査区の中央からやや北寄りの位置で、僅か約7m弱しか検出されなかつたが、検出範囲においてはほぼ直線的に走向し、北西側から南東側に向かってやや緩やかな水流があつたものと想定出来る。

これらの溝は、重複等による相互の新旧関係は確認出来るものの、埋土の状況からいざれもほぼ近い時期のものと考えられる。遺物が出土したのは4号溝のみであつたが、4号溝出土遺物等の状況から、これらの溝は、いずれも8~9世紀代の遺構と考えられる。

4. 縄文・弥生時代の遺構

Hr-FAの下層からは洪水堆積物が確認出来、さらに、その下層において、調査区南西隅部にて台地縁辺部を検出することが出来た。この面を精査し、土坑1基が検出

第4章 調査成果の整理とまとめ

された。

長径0.93m、短径0.73m、深さ0.16mの北東-南西方向に長い不整椭円形状を呈する土坑で、断面は広く扁平な逆台形状を呈して、底面は平坦である。

小規模で浅い土坑で、用途や機能は不明である。出土遺物が皆無であるため、時期を特定することは出来なかつたが、土層の状況等から縄文時代から弥生時代にかけてのものと考えられる。

まとめ

先述した通り、本遺跡周辺一帯は水田地帯であり、遺跡の南側に隣接する上武道路の建設に伴って、本遺跡の周辺では田口下田尻遺跡や閔根赤城遺跡、閔根細ヶ沢遺跡等が発掘調査され、9世紀から11世紀にかけての集落や製鉄関連遺構など多種多様な遺構が見つかっている。

周辺部では大規模な集落遺跡が多く発見されているが、本遺跡においては狭小な範囲における調査であったが、遺構の検出状況から、集落の一部とは考えにくく、中世から古代にかけて、水田耕作が営まれていた場所であったと考えられる。周辺における古代の大規模集落を支えた生産域の一角が検出されたと評価することが出来る。

第3表 遺物観察表

4号溝

探 国 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
			口 底 高	底 底 高			
第13回 PL.9	1 上師器 杯	溝東西寄り、溝底 より0.261m上。 ほぼ完形	口 底 高 9.0	底 底 高 12.0	細砂粒/良好/純い 相	口縁部は横挽で、体部は撫で、底部は手持ち削り。底部 内面に墨書き「野」。	9世紀前半
第13回 PL.9	2 上師器 輪	溝中央、溝底よ り0.171m上。 2/3	口 底 高 13.3	底 底 高 11.0	細砂粒/良好/純い 相	口縁部は横挽で、体部から底部は手持ち削り。口縁部は 内傾する。類例を見ない形態である。口縁部が内傾する形 態から7世紀後半代の杯に形態が近いとみられるが、やや 形態が異なる。正確な年代は今後の課題としたい。	古代
第13回 PL.9	3 上師器 杯	溝中央、2の北 側、溝底より 0.076-0.171m 上。 1/2	口 底 高 10.9	底 底 高 12.7	細砂粒/良好/純い 相	口縁部は横挽で、体部は撫で、底部は手持ち削り。体部 に丸みを廻すなど1よりも丁寧な作りをしている。	8世紀後半 4四 期-9世紀 第1四半期
第13回 PL.9	4 上師器 杯	理上 口縁部-底部片 底	口 底 高 9.2	底 底 高 12.0	細砂粒/良好/純い 黄柾	口縁部は横挽で、体部は撫で、底部は手持ち削り。体部 に丸みを廻すなど1よりも丁寧な作りをしている。	8世紀後半 4四 期-9世紀 第1四半期
第13回 PL.9	5 須恵器 杯	溝の中央よりや や東寄り。ほぼ 溝底。 口縁部-底部片	口 底 高 9.4	底 底 高 12.0	細砂粒/還元塗/灰 白	輪廻整形、回転は右回り。底部は回転削り。	8世紀前半
第13回 PL.9	6 上師器 杯か 底部	溝の西寄り、溝 底より0.225m 上。			細砂粒/良好/純い 相	底部は手持ち削り。内面は丁寧な荒廻きか、表面が平滑 すぎるため単位不明。体部は丁寧に打ち欠かれている。底 部だけのため不明な点が多い。体部は丁寧に打ち欠かれて おり、再利用されたとみられる。	古代
第13回 PL.9	7 須恵器 甕	溝の南東寄り、 溝底より0.012- 0.052m上。 口縁部片	口 底 高 29.8		細砂粒/還元塗/黄 灰	口縁部は輪廻整形、回転は右回りか、内外とも下位は斜 めに引け出され、口唇部下に凸筋が盛る。口縁部だけの殘存のため詳細は不明である。胎土は還 元せず酸化焰状態である。	古代

遺構外出土遺物

探 国 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
			口 底 高	底 底 高			
第20回 PL.9	8 弥生土器 壺	表上 口縁部破片			細砂、輝石/良好/ 純い黄柾	外反する平口縁で口端部肥厚。口唇部に無節LRを施す。	弥生時代中期 中葉
第20回 PL.9	9 弥生土器 壺	表上 同部破片			細砂、輝石/良好/ 相	横位集合沈線をめぐらし、波状沈線を介在させる。地文に LR横位施す。	弥生時代中期 中葉
第20回 PL.9	10 弥生土器 壺	表上 同部破片			細砂、輝石/良好/ 相	沈線を縱横に施して帯状区画し、LRを充填施す。	弥生時代中期 中葉
第20回 PL.9	11 弥生土器 壺	表上 同部破片			粗砂、輝石/良好/ 純い黄柾	沈線により重複角文を描く。地文にLR横位施す。文様帶 下は削り後、一部磨き。	弥生時代中期 中葉

写 真 図 版



1. 1面1号トレンチ全景(北東から)



2. 1面2号トレンチ全景(北東から)

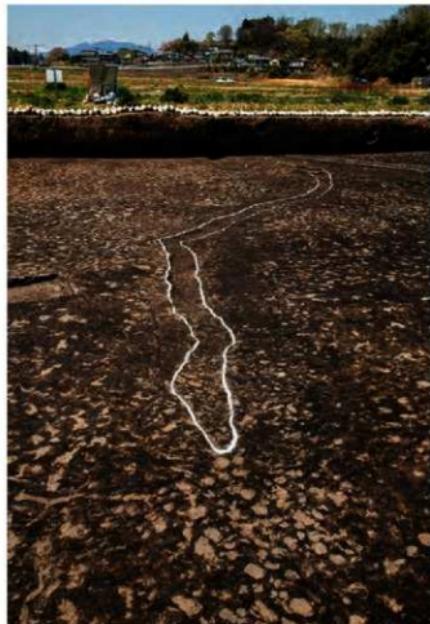
3. 1面3号トレンチ全景(北東から)



4. 調査区全景(南西から)



1, 2面全景(垂直、上が北西)



2, 1号溝全景(南東から)



3, 1号溝全景(北西から)



4, 1号溝A-A'セクション(南東から)





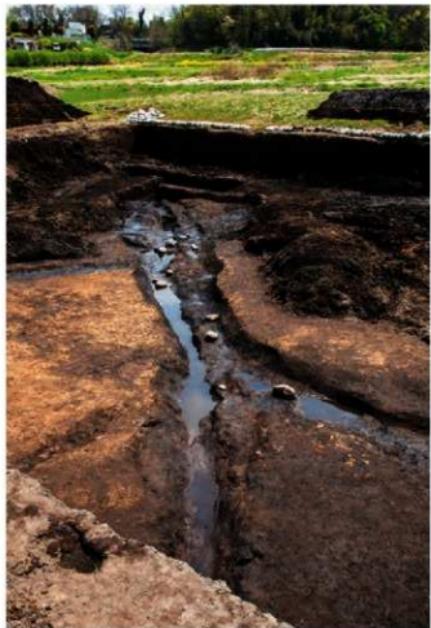
1. 3面全景(南西から)



2. 3面南西隅部、1号流路全景(南西から)



3. 2号溝全景(南東から)



1. 3・4号溝全景(西から)



2. 3号溝全景(北東から)



3. 4号溝全景(東から)



4. 4号溝A-A'セクション(東から)



5. 3・4号溝B-B'セクション(南西から)



6. 4号溝C-C'セクション(北西から)



7. 4号溝遺物出土状況(西から)



1. 5号溝全景(北東から)



2. 5号溝A-A'セクション(南西から)



3. 6号溝全景(南東から)



4. 6号溝A-A'セクション(南東から)



5. 4面全景(北東から)



1. 5面全景(南東から)



2. 6面全景(南西から)



1. 1号土坑全景(北西から)



2. 1号土坑A-A'セクション(南東から)



3. 4号トレンチA-A'セクション南西側(北西から)



4. 南西壁基本土層(北東から)



5. 北西壁基本土層(南東から)



6. 北西壁基本土層(南東から)

4号溝



2



3



6

遺構外



8



9



10



11

報告書抄録

書名ふりがな	せきねよこたいせき
書名	関根横田遺跡(前橋市0008遺跡)
副書名	一般国道17号(道の駅「(仮称)まえばし」)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	-
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	694
編著者名	高島英之
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	2021
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	せきねよこたいせき
遺跡名	関根横田遺跡(前橋市0008遺跡)
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばしせきねまち
遺跡所在地	群馬県前橋市関根町
市町村コード	102016
遺跡番号	0008
北緯(世界測地系)	36.440832
東経(世界測地系)	139.052099
調査期間	2020.04.01-04.30
調査面積	704.000
調査原因	道路建設(道の駅)
種別	水田
主な時代	中世、古代、縄文～弥生時代
遺跡概要	中世—溝1+平安時代中～後期—水田1+奈良～平安時代—溝5+土師器・須恵器+縄文～弥生時代—土坑1
特記事項	9世紀前半の墨書き土器「野」
要約	遺跡は群馬県庁の北東約5km、前橋市関根町に位置する。遺跡周辺一帯は水田地帯であり、標高は約132m前後である。遺跡の南には上武道路が東西に走っている。上武道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査において、周辺では8～11世紀の大規模集落や製鉄関連遺構などが発見されている。本遺跡では、縄文～弥生時代土坑1基、奈良～平安時代の溝5条を調査し、12世紀初頭の浅間山噴火によって被災した水田1面、中世の溝1条などの遺構を検出し、調査した。奈良時代の溝からは底部に「野」と墨書きされた8世紀代の土器が1点出土している点が注目される。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第694集

関根横田遺跡(前橋市0008遺跡)

一般国道17号(酒の槻(仮称)まえばし)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

令和3(2021)年10月7日 発行

令和3(2021)年10月12日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県邑楽郡大泉町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gumaiiban.org/>

印刷／上武印刷株式会社

